

尾張徳川家における唐絵の受容史的考察(一)

加藤 祥平

はじめに

一 徳川美術館所蔵の唐絵の基礎情報の提示をめぐって

二 箱・附属品から読み取れること

資料(一) 徳川美術館所蔵の唐絵の基礎情報

おわりに

はじめに

徳川美術館は、尾張徳川家(以下「尾張家」と略称する⁽¹⁾)の収蔵品を保存・公開・研究する施設として昭和十年(一九三五)に開館した。近代にかけて尾張家は開館前後に売立を行い多くの作品を手放しましたが、それでも同家の収蔵品の全容をうかがい知るに足る作品群を、徳川美術館は収蔵している。また、一つの大名家の道具帳がまとまった数で伝存していることが少ないなか、その全てが遺されているとは言えないまでも、江戸時代に尾張家で作成された道具帳は、細かに数えれば五百冊にもものぼる点数が遺さ

れている⁽²⁾。尾張家の道具帳と作品群が揃って収蔵されていることは、各作品の収集時期のみならず、同家における総体的な収集過程や傾向、管理方法などをたどることを可能とする。

こうした徳川美術館の収蔵品の特色に基づき、名古屋蓬左文庫で令和三年(二〇二二)十一月十三日から十二月十二日まで開催した徳川美術館・名古屋蓬左文庫企画展「唐絵―尾張徳川家の中国絵画―」(以下「唐絵展」と略称する⁽³⁾)では、中国絵画史的観点ではなく、受容史的観点に基づいた展覧会構成・作品紹介を主眼とした。受容史的観点とは、尾張家という大名家において唐絵がどのように使用・収集・管理されていたか、という三つの視点である。その準備として、徳川美術館でこれまで中国絵画として紹介された経歴のある作品について、箱・附属品を含めた悉皆調査を行った上、尾張家の道具帳に記載された情報を翻刻し、作品同定を行った。

唐絵展の開催に際しては、これまで徳川美術館の所蔵する唐絵をまとめて刊行物として紹介したことがなかったため、簡易図録を刊行した⁽⁴⁾。しかし、わずかな紙数では、準備段階で得られた知見を紹介しきることは難し

かった。このため、数回に渡り、尾張家における唐絵について、受容史的観点に基づいて考察する。初回となる本稿では、徳川美術館が所蔵する尾張家伝来の唐絵の基礎情報を提示する。

一 徳川美術館所蔵の唐絵の基礎情報の提示をめぐって

本稿は、作品の基礎情報(法量・材質・表装裂)に加え、箱(形状・紐・墨書(箱書)・貼札(箱に貼られた紙札)や包装・外題・書付(添状)といった附属品の情報を重視する立場をとる。

従来、(特に絵画史を主として)美術史学では、作品の内容や作品の真贋に重きが置かれ、表装や箱・附属品の情報は割愛される傾向にあった。作品に込められた芸術性を読み取り、作品を芸術の展開に位置付けながら、芸術の展開を追うことを命題とした美術史学では、作品そのものが検討の対象であり、作品の製作に携わった当事者たちや製作時に添えられた附属品はともかく、後世の受容者や受容されていく過程で附された事物は主たる対象とならなかった。

一方、茶道文化史学の分野では、作品本体と同様に、表装や箱・附属品の情報が伝統的に重んじられてきた。高橋箒庵(義雄。一八六一〜一九三七)によって編纂され、大正十〜十五年(一九二一〜二六)に刊行された『大正名器鑑』を例にとると、法量・重量・重量・文献情報・観察記録のみならず、箱や御物袋・仕覆・書付といった附属品の情報が詳細に列記されている。⁶ こうした傾向の下地には、茶の湯における作品の評価が、鑑賞性のみならず由緒を重視してきた蓄積がある。⁹ そして、両者の観点の差異は、展覧会図録での図版や解説の在り方に少なからず反映されてきた。

こうした状況については、昭和五十九年(一九八四)から平成九年(一九九七)にかけて、玉蟲敏子氏と山下裕二氏が既に言及している。¹⁰ 両氏の指摘から、しばらく年月を経て、現在では、絵画史からの附属品の積極的な情報提示が散見されるようになってきた。代表例を挙げれば、題簽や跋文・箱書といった本紙以外の情報を積極的に活字化・公開している、平成二十三年(二〇二一)に発足した「関西中国書画コレクション研究会」による『関西九館所蔵 中国書畫録』が特筆されるだろう。¹¹ 令和二年(二〇二〇)には、廣海伸彦氏によって、鑑定史の視点を交えながら、出光美術館所蔵の狩野派関連の絵画作品に附属する箱書・外題・添状の情報が詳細な図版とともに紹介されたことも注目される。¹² また、附属品そのものではないが、令和元年(二〇一九)五月に東京文化財研究所により公開された「売立目録デジタルアーカイブ」は、作品移動史や伝来、作品・作家研究の保管材料としての売立目録の重要性に着目した、作品本体以外の情報を積極的に評価・公開していくきわめて画期的な事業と言える。¹³

しかし、未だ文字情報に重きが置かれ、箱の形態や箱に貼られた貼札、紐、包装といった附属品の情報が積極的に提示されることは少ない。

箱は、造りを見ることによって、旧蔵者や内容品が享受された文化圏(人物の交流圏や茶道の流儀など)を読み取れることもある。¹⁴ 旧蔵者の好みによって仕立てられる箱にはそれぞれ特徴があり、著名な例では、広島藩浅野家十代斉賢(二七七三〜一八三〇)の蒐集品に知られる、糸柱目桐箱を特徴とする「浅野箱」や、紀伊徳川家伝来品に知られる、杉材の外箱を特徴とする「紀州箱」などが名高い。寛永期に作られた箱の一部には、小堀遠州(一五七九〜一六四七)所用品や大徳寺龍光院に伝わる江月宗玩(一五七四〜一六四三)所用品に代表されるような、蓋や側面の稜に面取を施した印籠蓋

造の桐箱が散見される⁽¹⁵⁾。また、箱の造りのみならず、同一の所蔵元の作品の場合、箱書も同一の筆者によってされることがあり、箱書の筆致も旧蔵者の判断材料となりうる。

一般には「蔵札」とも呼ばれる貼札は、整理・点検や近代の売立などの際して貼られていることが多い。実際、市場に出た尾張家の旧蔵品の箱で見かけることの多い、葵の葉が刷られた貼札は売立に際して付された貼札である(挿図1)。貼札は、旧蔵者の庵号や斎号などが記されていることも多く、旧蔵者の特定に用いられやすい⁽¹⁶⁾。

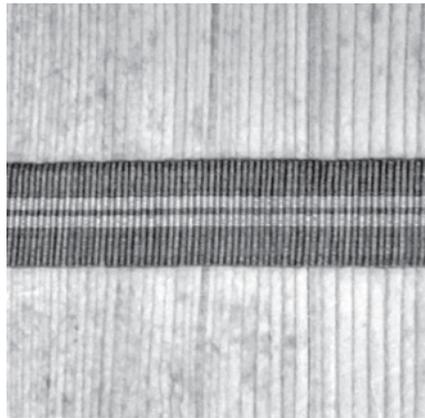
紐の場合、摩耗しやすく、箱の造りによっては取り替えることも容易であることから、当初からの紐であることは少ないが、所用者の好みによって仕立てられていることもあり、旧蔵者の情報を得られることもある。例えば、尾張家では、萌黄真田紐や萌黄地二本白筋真田紐(挿図2)が用いられていることが多く、出雲国松江藩十代藩主松平不昧(治郷。一七五一～一八一八)の所用品では、茶地紺安良筋真田紐や白地紫筋真田紐などいくつか常用された紐が見受けられる。

作品を包む包装や風呂敷にも、旧蔵者によって傾向がある。代表例としては、更紗製の帙が添えられることの多い「浅野箱」が挙げられる。尾張家の場合には、添えられた時期はそれぞれ未詳ながら、作品本体の包装に浅葱平絹や鬱金木綿が用いられ、そのほとんどに墨書で内容品の名称が記されている(挿図3)。また、近代の数寄者の場合、益田鈍翁(孝。一八四八～一九三八)や馬越恭平(一八四四～一九三三)の旧蔵品に、それぞれ特定の文様の風呂敷が附属していることも多い。

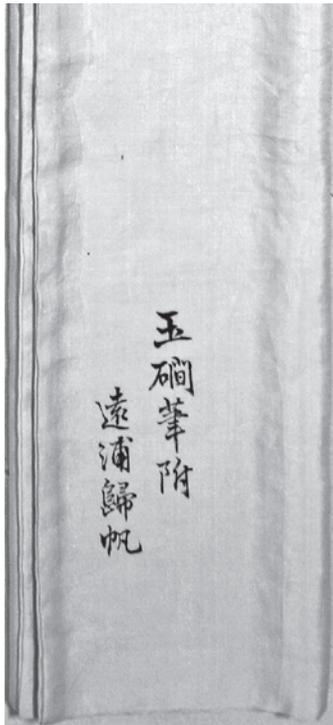
こうした附属品の情報は、美術史学においては一部で信憑性に疑問が抱かれてきたことも事実だろう。実際に、いつの時点の作為か未詳ながら、



挿図1 趙昌筆 花籠図
外箱蓋表の貼札



挿図2 萌黄地二本白筋真田紐



挿図3 玉潤筆・同賛 遠浦歸帆図
浅葱地絹袷包装(部分)

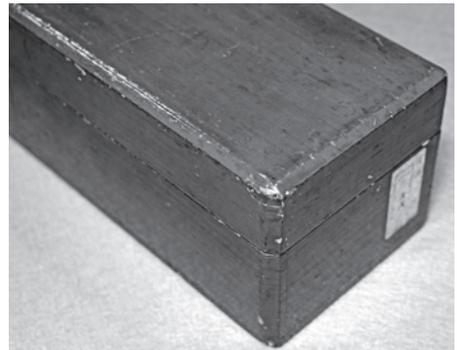
意図的な貼札の貼り替えや箱の入れ替えがなされた作品に、筆者は遭遇したこともある。諸所におけるそうした事例が、附属品類を重視する考え方への批判的意見の根拠にもなっているのだろう⁽¹⁷⁾。しかし、書画であれば本紙への補筆や落款の後入れなども頻繁に見受けられ、箱や附属品にのみ後世の意図的な変更が加えられるわけではないだろう。よって、いかなる分野であっても、偏見なくかつ慎重に、作品本体と箱や附属品を注視することがより確かな情報へ近づく方法と考える。

二 箱や附属品から読み取れること

では、実際、尾張家の唐絵の箱や附属品・表装裂から、どのような情報を得られるのだろうか。わかりやすい例を挙げてみよう。

まず、箱に注目すると、①玉潤筆・同賛「遠浦帰帆図」(重要文化財。以下、資料二)に記載の作品については、資料中の番号を掲げる)は、華麗なる伝来経歴を持ちながら、一重箱という簡素な次第となっている。これは①が徳川家康から尾張家初代義直(一六〇〇〜五〇)へ遺品として譲られ、以後一度も他家へ譲与されることがなかったことに起因する。一般に、箱が追加されるのは所蔵者が変わる時で、新たな所蔵者の好みに仕立てたり、旧蔵者の情報や好みを尊重しつつ保存したりするために箱が追加される。言い換えれば、所蔵者がほとんど変わらなかった作品は新たに箱を添えられる機会がない。①に箱の少ないことは、①が尾張家から一度も出なかったことの裏返しでもある。なお、①のみならず、市場に出ずに徳川美術館へと収まった尾張家の伝来品は、箱の少ないことが共通している。

また、①の箱は溜塗となっており一見分かりづらいが、面取の幅や竹釘



挿図4 玉潤筆・同賛 遠浦帰帆図 箱(部分)



挿図5 孫億筆 花鳥図 箱(部分)

の太さなどから、寛永年間(一六二二〜四四)前後に作られた箱とみられる(挿図4)。同様の造りである、⑫伝張路筆「山水図」の箱もほぼ同時期に作られた箱とみられるが、箱書の書体や字の配置から、箱書がされたのは時代が下るようにも見受けられる。⑭孫億筆「花鳥図」の箱も(挿図5)、一見これらと同じ造りに見えるが、面取りの幅はやや狭く、竹釘の位置が面取部分より内側にあり、竹釘を差し込んでから面取りがなされている①や⑫とは明らかに造りが異なっている。

元禄十一年(二六九八)三月十八日、五代將軍徳川綱吉が尾張家麴町邸へ御成した際に、二代光友に下賜された、⑨伝牧谿筆「柳燕図」(重要文化財)の箱は二重箱で、内箱は白木である(挿図6)。白木の箱は、一見簡素に見えるが、柾目の整った桐が用いられ、箱の稜に几帳面取が施してあり、紐の座金は銀製の四花弁形で、手の込んだ意匠となっている。白木で几帳面取の施された箱は、徳川將軍家に伝来していた作品に多く、内箱は⑨が徳



挿図6 伝牧谿筆 柳燕繪
内箱(部分)



挿図7 趙昌筆 花籠図
外題

川將軍家にあつた頃に添えられたと考えられる。

次に箱の貼紙に注目すると、⁽¹⁷⁾伝謝時臣筆「夏木垂陰図」の箱の蓋裏には、「御表具和物切 巳三月伏見屋甚衛門申聞」という貼札がある。伏見屋甚衛門は、正しくは伏見屋甚右衛門のこと、江戸の唐物屋である。ある時期に尾張家と伏見屋甚右衛門の交流があつたことがうかがえるが、売買関係にあつたかは未詳である。⁽¹⁸⁾

鑑定に際して付される外題も、鑑定者と鑑定結果以外の情報を提供してくれる。⁽¹⁰⁾趙昌筆「花籠図」は、現在は「花籠図」と通称されるが、箱書には「芙蓉図」とあり、江戸時代の道具帳にもおおよそ「芙蓉図」と記されている。さらに八双傍らに「雑花 趙昌筆」と墨書のある外題が貼られている(挿図7)。それを手掛かりに道具帳を徴すると、享保六年(一七二一)に作られた「御数寄屋方御道具帳 張札九拾四鈞成 享保六年丑三

尾張徳川家における唐絵の受容史的考察(一)

渡四冊之内改御用人幡野弥五兵衛 大目付埴原金左衛門 壺(什器古帳六・一)に記された、「趙昌筆」と添書きのある「一雑花の絵御掛物 一箱」に⁽¹⁰⁾を同定できる。そして、外題をよく見れば、経年の摩耗によって見えづらいが、「雑花」の右下に薄らと「左」と書かれており、元は対幅の左幅であつたのが分割され、のちに尾張家に入ったことも判明する。

展覧会図録の図版で省かれがちな表装裂からも、美的趣味を伝えるのみならず、旧蔵者の情報を得られる。⁽⁸⁾伝陳容筆「籠図」・伝牧谿筆「虎図」(重要文化財・重要美術品)については、従来『豊臣御数寄屋記録』(東京藝術大学附属図書館ほか蔵)に記載があることが指摘されていた。⁽¹⁹⁾それによると、文永四年(一二六七)に高麗から鎌倉幕府七代將軍惟康親王に贈られ、弘安六年(一二八三)に小鹿島公業に下賜されたという。その後、暦応二年(一三三九)に小鹿島氏から足利尊氏に献上され、十四代將軍足利義栄から織田信長へ譲られ、さらに豊臣秀吉から木村重成、島左近へ伝わったことが記されている。しかし、『豊臣御数寄屋記録』については後世の記述が少なからずあることも指摘されている。⁽²⁰⁾記載品の内、現存品は⁽⁸⁾のみであり、一方で、併記される表具裂と現状の表具裂が一致しない。また尾張家の道具帳には、『豊臣御数寄屋記録』に記される伝来経緯についての記録は全く記されていない。⁽²¹⁾そこで、改めて『豊臣御数寄屋記録』を検証すると、いくらか不可解な点に気づく。⁽²²⁾本品に関する『豊臣御数寄屋記録』記載の伝来情報については、偽書である可能性を含め、検討の余地を残す。

表装に着目してみると、⁽¹²⁾や⁽¹⁶⁾呉偉筆「許由巢父図」、⁽²¹⁾劉俊筆「仙人図」(重要美術品)などは、本紙を囲む中廻に大きな丸紋の金欄が用いられている点共通しており、大名家の書院などの広い壁面の床で映えるように表装されていたことがうかがえる。

また、⁽²⁶⁾「柳鷺図」は、表装裂と同じ裂が徳川美術館に現存している。⁽²³⁾

道具帳を調べると、文政十一年(一八二八)頃に作られた道具帳に初出が確認でき、未表装の状態であったところ、天保十四年(一八四三)八月に当時の当主であった十二代斉荘(一八一〇～四五)の手元へ移され、そこで掛幅装とされたことがわかる。⁽²⁴⁾ 尾張家の唐絵に当主の好みが反映されたことがわかる作品が乏しいなか、斉荘の関与が確実である本幅は貴重である。

おわりに

以上のように、箱や附属品からの情報の読み取りは、これまでの作品からの情報をより多彩なものにしてくれる。こうした読み取りによって、眠っていた情報が各地で再発見され、より多角的で包括的な研究が活発化することを願う。

今回は、尾張家の道具帳から伝存する唐絵の記録をすべて紹介するとともに、道具帳からうかがえる唐絵の管理実態などについて詳しく述べる。

註

- (1) 本稿では、特に記さない限り、「尾張家」は江戸時代の同家を示すこととする。
- (2) 尾張家の古文書・古典籍類は、徳川美術館の姉妹機関である徳川林政史研究所や名古屋蓬左文庫にも収蔵されている。尾張家の道具帳については、以下の研究がある。
- ・佐藤豊三「將軍家使者饗応についての一考察」『金鯢叢書』一九、徳川黎明会、一九九二年。
 - ・佐藤豊三「享保時代における尾張徳川家の蔵帳整理について」『金鯢叢書』二五、徳川黎明会、一九九八年。

・山本泰一「尾張徳川家の幕末期における什宝(収蔵品)の種類と数量について(一)―絵画・書跡編―」『金鯢叢書』三一、徳川黎明会、二〇〇四年)、同「尾張徳川家の幕末期における什宝(収蔵品)の種類と数量について(二)―陶磁器・硝子器編―」『金鯢叢書』三三、徳川黎明会、二〇〇六年。

- (3) 「唐絵」という語句は、広義には中国の景物や人物を描いた中国絵画・日本絵画をも示すが、唐絵展および本稿においては、江戸時代以前に中国絵画と認識されていた絵画とし、現在では中国以外で作られたと見なされる絵画も含む。
- (4) 「唐絵―尾張徳川家の中国絵画―」(徳川美術館、二〇二一年)。なお、本冊子収録の絵画は、唐絵展の出陳作品の内、徳川美術館が収蔵する尾張家伝来の唐絵に限定した。

- (5) 美術史研究の役割については、先学諸氏の論究があるが、以下がもっとも端的な論考として挙げられる。家永三郎「美術史学の対象」『美術史』三、美術史學會、一九五一年、中村二柄「美術史学の対象―家永教授に問ふ―」『美術史』五、美術史學會、一九五二年)、家永三郎「美術史学と歴史学―中村氏の批判に答ふ―」『美術史』八、美術史學會、一九五三年)。これらの議論を簡潔にまとめた言及として、塚本磨充「はじめに」『美術―から「文物」へ―「交流史」を結節点とした方法論的な若干の考察』第三節「美術史学と歴史学」(『北宋絵画史の成立』中央公論美術出版、二〇一六年)がある。

- (6) 美術史と茶道史の観点を比較しながら記述するが、筆者は両者を二項対立的に捉えているわけではなく、美術史の検討対象を再確認するため、便宜的に両者を比較する。

- (7) 高橋義雄編『大正名器鑑 第一〜九編』(大正名器鑑編纂所、一九二一〜二六年)。

- (8) 『大正名器鑑』の網羅的な情報提示は、十八世紀前半に成立した「名物記三冊物」や寛政元年(一七八九)に成立した「古今名物類聚」といった、先行する「名物記」の影響を受けている。

- (9) 熊倉功夫「茶の美学の試み」(『名宝日本の美術 第16巻 利休・織部・遠州』小学館、一九八三年)。

- (10) 玉蟲敏子「道具と美術のあいだ―茶の世界における造型作品の鑑賞について」

『季刊日本思想史』二三、ペリかん社、一九八四年）、山下裕二「道具としての「唐絵」・美術としての「唐絵」―牧谿・玉潤を中心として」、『山上宗二記研究三』茶の湯懇話会、一九九七年。

(11) 『関西九館所蔵 中国書畫録Ⅰ・Ⅲ』（関西中国書画コレクション研究会、二〇一三―一八年）。

(12) 廣海伸彦「所蔵絵画作品の付属品に関する基礎的考察（一）―狩野家発給の資料を中心に」、『出光美術館研究紀要』二五、出光美術館、二〇二〇年）、『狩野派 画壇を制した眼と手』出光美術館、二〇二〇年。また、関連する論考としては、野田麻美「真贋論の行方―添帖のこと」、『アマリス』一四一、静岡県立美術館、二〇二二年）が挙げられる。

(13) 『売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望―売立目録の新たな活用を目指して―』（東京文化財研究所、二〇二二年）。本事業の企図については、同書籍中の安永拓世「売立目録デジタルアーカイブの概要」が詳しい。

(14) 箱や箱書、その他附属品については、以下の論考・書籍が詳しい。
・竹内順一「箱書の整理」、『茶の湯美術館』二二 角川書店、一九九七年）。

・小田榮一「茶道具の箱と箱書」、『淡交社』二〇〇三年）。

(15) もちろん、後世にこれらを模して作られた箱もあるが、材の厚薄や竹釘の寸法などにより、おおよその区別が可能である。

(16) ただし、売立時に際してのみ貼られた貼札もあり、注意が必要である。この貼札の場合、いわゆる「売立目録」に作品の名称か図版が掲載されていないければならないが、「売立目録」に記載がないにもかかわらず貼札が貼られている作品も散見される。明らかな後世の意図的な貼り替えの事例とみられる。

なお、近年の論文・展覧会図録では、貼札の印を拡大して実寸大で掲載する例もあるが、一方で偽造に悪用される可能性も否定できない。かつて某美術倶楽部で各旧蔵者の貼札をまとめた書籍を刊行する計画が立ち上がった際、悪用され却って市場を混乱させかねないとして、中止になったと聞く。掲載に当たっては、図版に意図的な改変を加えつつその旨を併記する、といった対策をとることも必要だろう。

(17) 箱書への批判については、前掲註(9)熊倉氏論文が詳しい。

(18) 伏見屋甚(右)衛門は、亀田宗振との同人説もあるが、矢野環氏によって、別人の可能性が指摘されている。矢野環「名物記の生命誌24 『名物記三冊物』―土屋蔵帳・神尾蔵帳―」、『茶の湯』三九二、茶の湯同好会、二〇〇六年）。

(19) 井手誠之輔「李禎筆 竜虎図について」、『大和文華』七五、大和文華館、一九八六年）、志賀太郎「作品解説」龍図 陳容筆（『室町將軍家の至宝を探る』徳川美術館、二〇〇八年）。

(20) 『豊臣御数寄屋記録』については、以下の文献を参照した。

・黒田智「史料紹介『豊臣御数寄屋記録』」（金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要）八、金沢大学人間社会学域学校教育学類、二〇一六年）。

・宮下支覇「研究ノート『豊臣御数寄屋記録』の史料的价值」、『茶書研究』五、茶書研究会、二〇一六年）。

・黒田智「天皇と天下人の美術戦略」、『天皇の美術史3 乱世の王権と美術戦略』室町・戦国時代』吉川弘文館、二〇一七年）、一九三―二〇〇頁。

(21) 道具帳での初出は享保六年（一二二二）の「御讓道具」〔什器百帳四・二〕だが、当時「御讓道具」〔当主代々の相続品〕と記され、また朱書で「権現様御讓（家康所用品）と書き添えられている。

(22) 『豊臣御数寄屋記録』に関する具体的な疑問点は、以下のとおり。

(1) 秀吉の所蔵品として茶会記に出てくる作品が登場しない。

(2) 現在同定可能な作品が⑧以外に確認できない。

(3) ⑧の表具に記された、「満洲（錦）」という表現が、これまで管見に入った室町時代末期から江戸時代初頭までの史料に見いだせない。

(4) 淀屋辰五郎の所蔵情報に異常に多い。註(20)宮下氏論文で指摘。

(5) 織部の旧蔵情報が異常に多い。註(20)宮下氏論文で指摘。

(23) 一文字は裂四二、中廻は裂一〇三二、上下は裂一二二の裂が該当する。

(24) 拙稿「尾張徳川家の唐絵を探る―『柳鷲図』をめぐる―」、『葵』一二二〇、徳川美術館、二〇二二年）。

（徳川美術館 学藝員）

資料(一) 徳川美術館所蔵の唐絵の基礎情報

〔凡例〕

- ・本資料は、現在徳川美術館が所蔵する、江戸時代の尾張家において「唐絵」として認識されていた絵画の基礎情報および伝来に関する情報を提示することを目的とする。
- ・絵画の図版については、『唐絵―尾張徳川家の中国絵画―』(徳川美術館、二〇二一年)を適宜参照されたい。掲載頁は「『唐絵』四」などと表記し、徳川美術館での作品番号に続けて記した。
- ・作品の掲載順は、尾張家の道具帳全体で存在が確認できる順とした。
- ・作品の記載項目は、材質・法量、表装、賛・落款印章・鑑蔵印、箱、附属品、近年の修理記録、文化財指定、備考、参考文献を掲げた。
- ・一般的に江戸時代以前では、掛物の左右幅の区別・表記を作品本位で行っており、尾張家もその例にもれない。ただし、本資料では便宜上、左右幅の区別・表記を鑑賞者本位とする。
- ・記載項目「法量」の単位は、センチメートルである。表装の総幅は、軸首を除いた値である。
- ・記載項目「箱」では、貼札の内容は「□」の中に記した。
- ・判読困難な字は「□」とし、摩耗や欠損など状態による場合は、右側にその理由を記した。朱書の部分は、『朱書』のように表記した。印は『○○』(朱文印)のように記したが、現在徳川美術館で使用されている整理用の貼札については、本資料に反映しない。また、現行の作品管理で用いられている作品番号入りの貼札や、徳川美術館設立以後に付された整理用の貼札については省略した。
- ・記載項目「備考」には、補足情報および尾張家以前の伝来に関する情報

を記述した。

- ・記載項目「近年の修理記録」では、軽微な修理は省略した。
- ・記載項目「参考文献」には、各作品に直接言及したり、重要な関連作品に言及し、特に注目される文献を挙げた。
- ・文の改行は基本的に原文の配置の再現を目指した。ただし、文字列の配置を再現する必要性がなかった場合など、一行に複数行を記す際は「」を加え、改行箇所がわかるようにした。
- ・本来の文字の配置通りとなるよう努めたが、朱書や貼札・印の箇所は本来の位置からズレが生じることがある。特に表記の位置に注意書きを要する場合は、「○上ノ付箋ノ下ニアリ」のように表記した。なお、文字の配置が原文の配置通りとすることによって、却って翻刻文が解釈しづらくなる場合は、解釈しやすいように配置を改めた。
- ・当時の文字表記も重要な情報であり、箱書や道具帳の照合とも関わってくる可能性が高いため、基本的に異体字もそのまま活字化した。ただし、変体仮名は原則として仮名に直した。
- ・文字のサイズについては、史料や箱ごとでサイズを定めたが、全史料・箱を通した文字サイズの統一は行っていない。
- ・なお、以下の作品については、徳川美術館で中国絵画として展示した履歴があるものの、左記の理由から、本稿では採り上げなかった。
- ・牧谿筆 洞庭秋月図(掛物二〇六)
- ・観音・梅竹図(掛物八〇)
- ・白衣観音像(神仏画二二)
- ・瓦字筆 米法山水図(掛物一三五)
- ・牧谿筆「洞庭秋月図」は徳川宗家(将軍家)に伝来しており、経緯が未詳

ながら、昭和十八年（一九四三）に徳川美術館の蔵品となったため、本稿では対象としない。

「観音・梅竹図」は、近年元時代の絵画として展示されていた。しかし、画絹から室町時代の水墨画とみなされることと、尾張家の道具帳などにおいても「可翁筆」と伝称・記録されてきたことを考慮し、本稿では対象としない。

「白衣観音像」については、画絹から室町時代の水墨画とみなされることと、尾張家においても中国絵画として扱われた形跡はなかったことから、本稿では対象としない。

弭字筆「米法山水図」については、江戸時代の全ての道具帳を徴したが、同定できる道具が見当たらなかった。また、明治五・六年（一八七二～七三）頃に作成された「什器目録」（全十九冊）、同十三年七月に作成された「道具目録」（全八冊）、同二十四年八月以前に作成された「道具目録」（全九冊）の掛物（懸物）の項にもはっきりと同定できる道具を見出せなかった。

弭字筆「米法山水図」は二重箱で、外箱の身の底裏には「明治四十五年三月新調」と墨書があり、蓋表には「弭字筆山水」と記されている。この掛幅の筆者について印章を解読し「弭字」という情報を提供したのは、明治四十三年以降に、尾張家が鑑定を依頼した今泉雄作（一八五〇～一九三二）である。外箱より以前に製作されたとみられる内箱の蓋表には、「墨画山水 一軸」とのみあり、筆者未詳の掛幅として扱われていたことがわかる。また本稿で採り上げた中国絵画の多くは、江戸時代に貼られた複数の紙札が箱の蓋裏に貼られていたが、「弭字筆 米法山水図」には、近代に身短側面に付けられた「上三拾六号 墨画山水」（番号は朱書）とい

う貼札と同内容の「上三拾六号」（朱書）と記された貼札しか確認できない。これらの事実から、弭字筆「米法山水図」は、明治時代の後半になって尾張家にもたらされた道具と見なせるが、その経緯については本稿の方針から、本稿では追及しない。

また、高麗仏画については、尾張家の記録上ではあくまで「仏画」という認識であり、本稿の対象としない。

① 重要文化財 名物 遠浦帰帆船 玉潤筆・同賛

一幅（掛物六六・『唐絵』四）

〔材質・法量〕

掛幅装 紙本墨画

本紙縦三〇・四 横七六・六、表装総丈一〇八・〇 総幅八四・三

〔表装〕

一文字・風帯薄茶地角龍文金襴、中廻紺地一重蔓牡丹唐草宝尽文金襴、

上下萌黄地亀甲文に蔓牡丹文金地金襴、軸首象牙寸切

〔賛・落款印章・鑑蔵印〕

・賛

無邊刹境入毫端

帆落秋江隱暮嵐

残照未收漁火動

老翁閑自説江南

遠浦帆帰

・落款印章あるいは鑑蔵印

〔三教弟子〕（朱文方印）

〔箱〕(現在は近年の修理の際に新造された新箱に収納。新箱については省略。)

・溜塗印籠蓋造(蓋表・側面の稜に面取) 萌黄真田紐 真鍮製梅花形座金

蓋表・金粉字「遠浦帰帆 玉瀾筆」【墨書】「名物」

〔附属品〕

・浅葱絹袷包装・墨書「玉瀾筆附／遠浦帰帆」

・書付1(賛の写)一枚・墨書「無邊ノ刹ノ境入ニ毫端ニ帆落テ秋ノ江隠ル暮ノ風ニ殘テ照未テ取漁ノ火ノ動ノ老ノ翁閑ニ自ラ説ニ江ノ南ニ遠浦帆歸」

包紙・墨書「玉瀾筆遠浦帰帆讚之詩寫」

・書付2(印章の写)一枚・墨書「玉瀾印 印章寸如斯／「三教弟子」(墨文

方印の写)三教弟子／右遠浦帰帆画讚之印／宋朝之人」

包紙・墨書「遠浦帰帆玉瀾筆御懸物印之寫／朝陽對月牧溪筆自讚御懸

物印之写／但中布袋直夫筆朱印中ハ一向不相見／無準筆三幅對

御懸物同寫」

〔近年の修理記録〕

・平成十四年(二〇〇二)七月一日〜同十五年三月三十一日、国庫補助金指

定文化財保存事業により修理。その際、解体時に旧軸の墨書「安政二年

乙卯十一月御修復出来 表具師小松屋治兵衛」が確認される。現在、旧啄木・

旧八双・旧軸は再使用せず別保存。

〔文化財指定〕

・昭和二十七年(一九五二)三月二十九日、重要文化財指定。

〔備考〕

・尾張家以前の伝来情報については、次のとおり。

・室町時代「御物御畫目録」(東京国立博物館蔵)

紙横

八景 玉瀾

※「八景 玉瀾」の一行は、各字が擦られ抹消されている。

・永享九年(一四三七)「室町殿行幸御飭記」(徳川美術館蔵)

於此御座敷三船之詩御披櫛
あり廿五日夜時御繪卷申

西御七間 八景玉瀾 東西にかゝる

・「清玩名物記」(小浜市立図書館「酒井家文庫」蔵)

繪 玉瀾之類

(中略)

帰帆 駿河

・「茶湯道具名寄」(茶道古典全集「遠州御蔵元帳」)

散在分

一京極茄子 一趙昌けしの繪 一玉瀾帆歸八幅之内

・「山上宗二記」(今日庵蔵)

玉瀾之八幅墨繪也 紙二書候

(中略)

其古ハ連歌師宗長所持

一遠浦帆歸 昔雪齋 北条殿ニ在 所持 其後今川義元所持

(中略)

右ノ繪何も讚あり 玉瀾ノ朱印也 どれも横繪也

・「山上宗二記 天正十七年二月江雪斎苑」(今日庵蔵)

御掛繪

(中略)

一遠浦帰帆 北条殿ニ有

ナシ本ハ連歌師宗長、其次今川義元

(中略)

イツレモ

右八幅ハ紙地、玉礪筆、朱印讚アリ、皆横画ナリ、口伝アリ

・「宗及茶湯日記(天王寺屋会記)」天正十八年(一五九〇)九月廿三日

九月廿三日朝 於聚楽、

殿下様 御茶被下候、 黒田勘解由殿 はりや宗和 宗凡

一床ニ帆帛御絵 但、今度北条殿より取候也、

・「松屋名物集」

(前略)

今川雪齋 歸帆玉礪

・慶長三年「(西笑和尚文案 第二冊79)(相国寺蔵)

当月十三日之尊書十六日拜見候、先度預貴札候、其折節御返事可申

入之處、一日相延候て其後取紛無沙汰非本意候、(中略)一太閤様御

気色一段能御座候由候、昨日者为御遺物先諸大名・諸奉公衆色々拝

領候、玉礪帆帛軸并金三百枚内府、御脇指・金三百枚大納言殿、中

納言殿へもすて子御壺其外金子等、備前中納言殿へハ初花の小壺、

安芸中納言殿へ七ツ台、其外諸大名過半御腰物、御はなし衆・諸奉

公衆大半金子十枚・五枚・三枚拝領候、小馬廻之衆金子一枚充、其

上誓詞各仕候、御祈禱ニ成可申候間弥可為御快気存候、御病中奇特

成被仰付様人間ならぬと申儀候(中略)七月十六日 山口玄蕃殿

〔参考文献〕

・高木文『玉潤牧谿瀟湘八景繪と其傳來の研究』聚芳閣、刊行年未詳。

・谷信一「御物御畫目錄」(『美術研究』五八、美術研究所、一九三六年)、

尾張徳川家における唐繪の受容史的考察(一)

四四五頁。

・永島福太郎校訂「松屋名物集」(『茶道古典全集 第十二卷補遺二』淡交社、一九六二年)、四七頁。

一九六二年)、四七頁。

・「遠州御蔵元帳」(『茶道古典全集 第十二卷補遺二』淡交社、一九六二年)、三二〇頁。

年)、三二〇頁。

・永島福太郎編『天王寺屋会記』(淡交社、一九八九年)、四三二頁。

・塚原晃「牧溪・玉潤瀟湘八景図―その伝來の系譜―」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊文学・芸術学編』一七、早稲田大学大学院文学研究科、一九九一年)。

・伊藤真昭・上田純一・原田正俊・秋宗康子編『相国寺蔵 西笑和尚文案 自慶長二年至慶長十二年』(思文閣出版、二〇〇七年)、二八―三一頁。

・「清玩名物記」(『茶道学大系 第十卷 茶の古典』淡交社、二〇〇一年)、三九四頁。

・衣若芬(田中伝訳)「玉潤「瀟湘八景図」の詩画と印章の研究」(『國華』一四一二、國華社、二〇一三年)。

・「資料一 山上宗二記 今日庵本」(『茶道文化研究』六、今日庵文庫、二〇一四年)、八九頁。

・「資料四 山上宗二記 天正十七年二月江雪齋宛」(『茶道文化研究』六、今日庵文庫、二〇一四年)、一八七頁。

今日庵文庫、二〇一四年)、一八七頁。

②重要文化財 名物 布袋図 伝胡直夫筆・偃谿廣聞賛 朝陽・対月図 伝牧

谿筆(無住子筆)・同賛 三幅対 (掛物二二〇・『唐絵』六)

〔材質・法量〕

掛幅装 紙本墨画

- ・中幅…本紙縦八三・九 横三三・〇、表装 総丈一七四・四 総幅五二・八
- ・左右幅…各本紙縦八〇・三 横三三・二、各表装 総丈一七四・四 総幅四八・五

〔表装〕

- ・中幅
- 廻一文字・風帯 紫地牡丹唐草宝尽文金襴、総縁 白茶地二重蔓大牡丹唐草文金襴、軸首象牙寸切
- ・左右幅

一文字・風帯 紫地牡丹唐草宝尽文金襴、中廻 白茶地二重蔓大牡丹文金襴、上下 萌黄地牡丹唐草文金襴、軸首象牙寸切

〔賛・落款印章・鑑蔵印〕

- ・賛・落款印章
- 中幅(布袋図)
- 長汀江上汝即大
- 士雲黄山前大士

即汝許汝換面改頭

決定當來補處 只不

許汝教壞人家男女

南山 黄聞 題

〔廣聞之印〕(白文方印) 〔偃溪〕(朱文方印) 〔起於潤東〕(朱文鼎印)

右幅(朝陽図)

趁暖做工夫 遇寒便得著

牽断一絲頭 金針好抛却

從今過老不知休 一任雪風

鳴屋角 元貞乙未夏午
悠山自青 無住子作并書

有人問我經中意 雲自悠

黄昏對明月 了此數行經

頭髮白如雪 老眼亮似星

・鑑蔵印

中幅…〔道有〕(朱文重廓方印)

左右幅…〔天山〕(朱文方印)

〔箱〕(現在は近年の修理の際に新造された新箱に収納。新箱については省略。)

・外箱…溜塗印籠蓋造 萌黄地二本白筋真田紐

蓋表…黒漆書 〔中〕左 朝陽 牧溪自画 自讀
右 對月 牧溪自画 自讀

三幅對 〔納〕(墨文円印)

墨書 〔三番〕

・内箱…蠟色塗印籠蓋造(合口金沃懸地、蓋表・側面の稜に几帳面取) 紫組紐 金製葵紋座金

蓋表…金粉字 〔中〕左 朝陽 牧溪自画 自讀
右 對月 牧溪自画 自讀

三幅對 〔

〔附属品〕

・外題(各幅の八双脇に貼付)三枚

中幅(布袋図)…墨書「布袋」直夫筆

右幅(朝陽図)…墨書「朝陽」左 牧溪自賛

左幅(對月図)…墨書「對月」右 牧溪自賛

・鬱金木綿単包裂(内箱用)一枚・墨書「牧溪直夫偃溪三幅對／御掛物中箱附」

・白絹袷包裂(掛物用)三枚・各墨書「中／直夫画偃溪賛／御掛物附」
墨書「左／牧溪自画讚／御掛物附」、墨書「右／牧溪自画讚／御掛物附」

・書付1(賛の写)三枚

中幅・墨書「布袋／長汀江上汝即一即一大士／雲黄山前大士即汝／許汝換レ面改ルヲカウベ／決一定當来ノ補レ處、只不レ許サレナシニ／教ニ壞レ人家ノ男女ノ南山／黄聞題」※端裏に墨書「中」。

右幅・墨書「朝陽／趁暖作二工夫退レ嚴便子得レ褥ヲ／南断一糸頭／金針好却却却／法令過レ老ヲ不レ知レ休」
任ス雪風ノ鳴ニ屋角ニ元貞乙未夢牛※端裏に墨書「左」。

左幅・墨書「對月／頭髮白ノ如レ雪ノ老眼亮ノ似レ星ニ／黄昏對二明月ノ上レ此ノ數一ノ行ノ經ニ有レ人心一我經一中ノ意ノ雲ハ自悠一々山ハ自ラ青シ／無住子作并ニ書ス」※端裏に墨書「右」。

・書付2(賛の写)三枚

中幅・墨書「長汀江上汝即大士／雲黄山前大士即汝／許汝換レ面改レ頭／決定當来補處 只不レ許レ汝／教ニ壞人家男女ノ南山 黄聞 題」※端裏に墨書「中」。

右幅・墨書「朝陽／趁暖做二工夫ノ遇レ寥便得レ著ノ牽ニ断レ絲頭ノ金針好抛却／從レ今過レ老不レ知レ休ノ一任雪風鳴ニ屋角ノ元貞乙未夏午」

※端裏に墨書「左」。

左幅・墨書「對月図／頭髮白如レ雪ノ老眼亮似レ星ノ黄昏對二明月一了二

尾張徳川家における唐絵の受容史的考察(一)

此數行經一ノ有レ人間我經中意ノ雲自悠々山自青ノ無住子作并書」※端裏に墨書「右」。

包紙・墨書「左朝陽中布袋三幅對讚之写／寛政九巳閏七月此訂ハ磯谷寛左衛門拜見之節」

・書付3(鑑識印の写)一枚・墨書「有仙不祥／(墨文方印の写)九分五厘強九分五厘／右牧溪自画讚印章」

「近年の修理記録」

・昭和六十三年(一九八八)五月十三日〜十二月十四日、修理。その際、旧啄木・旧八双・旧軸木は、再使用せず別保存。

「文化財指定」

・昭和九年(一九三四)九月一日、重要美術品指定。
・昭和二十六年(一九五二)十一月十四日、重要文化財指定。

「備考」

・尾張家以前の伝来情報については、次のとおり。
・室町時代「御物御畫目録」(東京国立博物館蔵)

紙

(中略)

偃溪賛

布袋梁楮 臨人形 自賛牧溪

・「舜旧記」慶長十五年十二月十一日条

予圓光寺牧溪直夫文字三幅下見二令持参也、

・「舜旧記」慶長十五年十二月十二日条

次萩原殿御禮卷物十卷・太万折紙・三幅文字牧溪直夫筆也、此分進

上也、

・書付2の包紙に記された「磯谷覚左衛門」は、寛政三年(一七九二)に留書奉行となった人物である。磯谷覚左衛門が本品を拝見した経緯は未詳だが、唐絵を管理する職掌にあった御小納戸や御数寄屋方の藩士以外が本品のように尾張家でも重要視されていた道具を拝見する機会があった例として興味深い。

〔参考文献〕

- ・谷信一「御物御書目録」(『美術研究』五八、美術研究所、一九三六年)、四四五頁。
- ・『史料纂集 舜旧記第三』(統群書類従完成会、一九七六年)、一九三―一九四頁。
- ・志賀太郎「無住子筆「朝陽対月図」対幅の主題と作者」(『金鯨叢書』三四、徳川黎明会、二〇〇八年)。

③重要美術品 名物 達磨・郁山主・政黄牛図 伝無準師範筆・同賛 三幅対

(掛物六七・『唐絵』五)

〔材質・法量〕

掛幅装 紙本墨画

- ・中幅：本紙縦八九・一 横三三・〇、表装 総丈一六四・六 総幅四四・三
- ・左右幅：各本紙縦八四・一 横三〇・〇、各表装 総丈一六四・一 総幅四四・二

〔表装〕

・中幅

廻一文字・風帯 紺地唐花唐草文金紗、上下：中廻 紫地二重蔓牡丹唐草

文金地金襴、軸首象牙寸切

・左右幅

一文字・風帯 紺地唐花唐草文金紗、中廻 紫地二重蔓牡丹唐草文金地金襴、上下 萌黄地牡丹唐草文銀襴、軸首象牙寸切

〔賛・落款印章・鑑蔵印〕

・賛・落款印章

中幅(達磨図)

径山 師範 挥手「無準」(朱文方印)「師範」(朱文方印)

意吹

分披不在春風着

話墮一花五葉自

江九年冷坐重々

觸忤梁王恚々渡

右幅(郁山主図)

無準 師範賛

山主

不怪它々是村

張無價数我儂

取得蚌蛤珠誇

〔仏鑑禪師〕(朱文方印)「無準」(朱文方印)「師範」(朱文方印)

左幅(政黄牛図)

千巖風悄々黄

犢歩遅々拳目

誰知己溪邊白

鶯鷺

無準師範題

「仏鑑禪師」朱文方印)「無準」(朱文方印)「師範」(朱文方印)

・鑑威印(三幅とも)

「道有」(朱文重廓方印)が捺されている。

〔箱〕(現在は近年の修理の際に新造された新箱に収納。新箱については省略。)

・外箱：溜塗印籠蓋造(現状の紐は新物に替えられているため、省略。)

蓋表：黒漆書「左郁山主 無準自画自讀」三幅對 〔納〕(墨文円印)墨書

〔中〕達磨 右政黄牛

・内箱：蠟色塗 印籠蓋造 合口金沃懸地(蓋表・側面の綾に几帳面取)

紫組紐 銀製菊花形座金

蓋表：金粉字「左郁山主 無準自画自讀」三幅對

〔中〕達磨 右政黄牛

〔附属品〕

・鬱金木綿単包裹(内箱用)一枚・墨書「無準師範禪師自画讀」御掛物附

・白絹袷包裂(掛物用)三枚・各墨書「無準師範禪師自画讀三幅對ノ内」

中達磨御掛物附)、「無準師範禪師自画讀三幅對ノ内」左郁山主御掛物

附)、「無準師範禪師自画讀三幅對ノ内」右政黄牛御掛物附

・防虫香二点(各々、萌黄地二重蔓牡丹唐草文金襴、白茶地撫子文金襴に

包まれる)

・伝相阿弥極札(打曇紙)一枚・墨書「無準」

包紙・墨書「無準札」筆者相阿弥ト古筆了伴申聞候」

尾張徳川家における唐絵の受容史的考察(一)

・書付1(名物道具に関する書付)...

墨書「覚」一休一行物是ハ御物之内ニ有 一花生きぬた青地紹翁所持 紀伊様と

有 右二色御家御所持之内ニ 同様之物有之候へ共 一行物者文字之儀

不相知御花生ハ紹翁所持之儀古帳ニも不相見其上右二色傳来

之儀も不相知故次かた 依之名物記ニ 載候御道具之内ハ此度入

不申事 一霰姥口御釜之儀 江戸鹿ノ子ニハ 紀州様御所持之内ニ相

見候得共是ハ右之 書物ニせめひほと云釜 書落シ相見候其上 此方

御帳ニも織部所持と 有之候姥口霰御釜 之由役所ニ而慥ニ覚 候之由

申候依テ名物記ニ 載候御道具之内ハ書入 申候 尤玩貨名物記ニハ 御

家御所持と相見候 一無準筆三幅對之 絵中古之御帳ニハ 驢馬乘連運

と有之 名物記等ニハいくさんしゆと 相見 不分明ニ付禪宗迄 相尋

候処 郁山主ニ相 極り候間 此度文字共 書改候 但左右之書付此方ハ

進候書付書誤り進候故 違申候 馬之方ハ左 牛ノ方ハ右也 禪隆寺ハ

来り候書付此内へ入置候

包紙・墨書「名物御道具書付」

・書付2(禪隆寺よりの書付。書付1に添う。)

墨書「左 政黄牛 僧宝傳十九 豆 錢 塘人也ハ 偈 頌 有リ今マ茲ニ略ス 中

達磨ノ右 郁山主ノ五 灯會ニ傳有リ 茶ノ陵ノ人也 乘ニ駒ノ馬ニ 渡リ橋ヲ

墮忽々然大悟ノ遂ニ有リ頌云我ニ有ニ神珠ノ一顆ノ久 文長ノ故ニ略ス 茲ニ不レ記セ

ノ右之三帖共ニ 禪家之祖師ニ而 御座候 運運ノ宗門之祖師ニ 覺不申候ノ詩人ニも 及所不申候以

上」※端裏に墨書「禪隆寺ハ来ル書付」。

・書付3(賛の写)三枚

中幅・墨書「蘆葉達磨ノ觸ニ忤 梁ノ王ニ恹 渡レ江ヲ 九ノ年冷坐

重々ニ話ノ墮 一ノ花五ノ葉自ニ分ニ披 不レ在三 春ノ風着レ意ニ吹 經

山 師範^{ハイレン}「師範^{ハイレン}」※一二三点については原文ママ ※端裏に墨書「中」。

右幅・墨書「郁山主^{シツトク}／収^{シユ}得^{トク}蚌^{ヘイ}蛤^{カク}珠^{ジュ}／誇^ホレ張^{ハル}ニ無^ム價^ゲ數^スヲ／我^ガ儂^ニ不^レ怪^レシ^マタ^ラ／它^コハ^レ是^コレ^ノ村^{ムラ}山^{ヤマ}主^{シユ}／無^ム準^{ジュン}師^シ範^{ハン}賛^{サン}」※端裏に墨書「左」。

左幅・墨書「政^{セイ}黄^{ワウ}牛^ウ／千^{セン}巖^{ガン}風^{フウ}／悄^{シヤウ}々々^{シヤウシヤウ}／黄^{ワウ}犢^{トク}歩^ポ遲^ヂ々々^{シヤウシヤウ}／舉^コレ^メ目^メ誰^{ナニ}知^チ己^キ／溪^{ケイ}邊^{ヘン}白^{ハク}鷺^ロ／無^ム準^{ジュン}師^シ範^{ハン}題^{タイ}」※端裏に墨書「右」。

包紙・墨書「無準御掛物讚之写」【墨書「上御教寄御供ノ式番」】
書付4(賛の写)三枚

中幅・墨書「蘆^ロ葉^{エフ}達^{タク}摩^マ／觸^{シユク}ニ忤^ブ梁^{リヤウ}王^{ワウ}ニ恟^{シユウ}々^{シヤウシヤウ}渡^{タク}江^{カウ}／九^ク年^{ネン}冷^{レイ}坐^サ重^{ジュウ}々^{シヤウシヤウ}話^ワ墮^ダ／一^{イチ}花^カ五^ゴ葉^{エフ}自^ジ三分^{サンブ}披^ヒ／不^レ在^ニ春^{シュン}風^{フウ}着^{シヤク}レ意^イ吹^フ／徑^{ケイ}山^{サン} 師^シ範^{ハン} 扨^テ手^テ」※端裏に墨書「中」。

右幅・墨書「郁^{イク}山^{サン}主^{シユ}／収^{シユ}得^{トク}蚌^{ヘイ}蛤^{カク}珠^{ジュ}／誇^ホレ張^{ハル}ニ無^ム價^ゲ數^スニ／我^ガ儂^ニ不^レ怪^レシ^マタ^ラ／它^コハ^レ是^コレ^ノ村^{ムラ}山^{ヤマ}主^{シユ}／無^ム準^{ジュン}師^シ範^{ハン}賛^{サン}」※端裏に墨書「左」。

左幅・墨書「政^{セイ}黄^{ワウ}牛^ウ／千^{セン}巖^{ガン}風^{フウ}／悄^{シヤウ}々々^{シヤウシヤウ}／黄^{ワウ}犢^{トク}歩^ポ遲^ヂ々々^{シヤウシヤウ}／舉^コレ^メ目^メ誰^{ナニ}知^チ己^キ／溪^{ケイ}邊^{ヘン}白^{ハク}鷺^ロ／無^ム準^{ジュン}師^シ範^{ハン}題^{タイ}」※端裏に墨書「右」。

包紙・墨書「無準御掛物讚之写」

書付5(鑑蔵印の写) 一枚・墨書「無準御懸物画之印(墨文方印の写)

道有 八分五厘弱 八分(墨文方印の写)

仏鑑禪師 一寸二分五厘 一寸三分(墨文

方印の写)無準 九分二厘 九分半ヨハリ

(墨文方印の写)四分五厘 四分五厘(右無

準讚之印明人(金山寺之和尚)

〔近年の修理記録〕

・昭和五十八年(一九八三)四月十三日〜十月二十二日修理。その際、旧啄

木三点、旧八双三点、旧軸木三点は、再使用せず別保存。旧軸木は各中央部に鉛の錘が埋め込まれており、現在は鉛が腐食・粉状化している。

〔文化財指定〕

・昭和九年(一九三四)九月一日、重要美術品指定。

〔備考〕

・尾張家以前の伝来情報については、次のとおり。

・室町時代「御物御畫目録(東京国立博物館蔵)

紙

渡江達磨

脇牧黄牛郁山主無準和尚畫并賛

・従来、十七世紀中に成瀬家から献上されたことは知られていたが、尾張家の蔵帳類にその時期を示す記述はなく、献上された時期や成瀬家です用した当主などの具体的な詳細は未詳であった。しかし、「成瀬氏世譜国字伝(犬山城白帝文庫蔵)に、左記の通り書き留められていることが判明した(参考文献参照)。

寛文元年辛丑年九月廿四日剃髮シテ改テ一岳ト号ス同三癸卯年五月九

日名古屋ニ卒ス享年七十

(中略)

光友卿御在江戸ニテ此ノ計ヲ開セ給ヒ御使ヒニテ御香典トシテ銀五

拾枚ヲ賜フ正虎遺物献進左ノ如シ

家綱公へ 御刀^{三代金拾} 一腰 基俊集^{定家ノ手跡}代金三百枚

光友卿へ 御刀^{青江} 一腰 基俊集^{定家ノ手跡}代金三百枚

松ノ木盆

光友卿成瀬四郎左衛門ヲ以テ御望ミニテ無準ノ讚牧溪ノ絵三幅対ヲ

進上ス此掛物往年

秀忠公上覧可レ有旨日上意ニ依テ指上ケレバ暫ク留置レ名物ノ由家
宝トナスヘキ旨上意ニテ正虎ニ返賜フ掛物ナリ

これによると、寛文三年（一六六三）に成瀬正虎が歿した際に、尾張家
二代光友の所望により、正虎の遺物として献上されたことがわかる。さ
らに、成瀬家にあつた頃、上覧のために秀忠の元へ送られていたが、「名
物」であることから家宝とすべきであるとして、正虎に返されていたこ
とが判明する。

・書付1については、現行の台帳にも特に内容が記されず、書かれた時代
なども検討された形跡が見られなかった。しかし、道具帳の記録を追っ
ていく中で、享保十三年（一七二八）三月に「上御数寄御道具帳写 享保
十三年三月改」（什器古帳四・五）を作成する際に書かれた書付であるこ
とが判明した。正徳四年（一七一四）六月の「上御数寄道具 正徳四年午
六月」（什器古帳三・四）の表記と比べると、書付1での調査が反映されて
いるのがわかる。

・書付2は、書付1に「禅隆寺今来り候書付」と記載されている。禅隆寺
は元和九年（一六三三）に初代義直から寺地を拝領して創建され、八代宗
勝の生母円珠院、九代宗睦生母英巖院の菩提所であった。当時の寺派は
未詳ながら、現在は妙心寺派の禅寺であり、おそらく当時も臨済宗で
あつたとみられ、そのために画題について尾張家から尋ねられたのだら
う。

〔参考文献〕

・白水正解題・寺岡希華翻刻「成瀬氏世譜国字伝」〔研究紀要〕一、犬山
城白帝文庫、二〇〇七年、七四頁。

尾張徳川家における唐絵の受容史的考察（一）

④ 墨竹図 二幅対（掛物一〇七七・唐絵）二二

〔材質・法量〕

掛幅装 紙本墨画

各本紙縦一〇六・二 横四四・八、各表装総丈二〇二・五 総幅五六・九

〔表装〕

一文字・風帯 白地輪無唐草文金欄、中廻 薄萌黄地木目文に雲花鬼文金
欄、上下 薄縹地紗綾形に二葉葵文銀欄、軸首象牙寸切

〔落款印章〕

各幅「江朝鼎印」（白文方印）

※ただし、印より上部に画絹を切り取り補絹した形跡が確認できる。

〔箱〕（現在は近年の修理の際に新造された新箱に収納。新箱については省略。）

・椀二方棧蓋造 萌黄地茶筋真田紐

蓋表・墨書「御懸物 竹之絵 二幅対」

蓋裏・朱書「地三十一号」朱書「上老番」墨書「四拾二番」

朱書「改」

身短側面・朱書「地三十一号」墨書「竹之畫」二幅

〔附属品〕

・鬱金木綿単包装（掛物用）二枚・墨書「竹之繪／御掛物附／二枚之内」

〔近年の修理記録〕

・平成六年（一九九四）八月二十日～十月三十一日、修理。その際、旧啄木
二点、旧八双二点、旧軸木二点は、再使用せず別保存。

〔備考〕

・明治～大正時代に現在の掛幅装になったとみられる。なお、昭和十五年

(一九四〇)一月十八日名古屋別邸にて売却処分の子定であったが、残留した。

⑤ 琴棋書画図 伝趙子昂筆 四幅対 (掛物八七・『唐絵』一三)

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本著色

各本紙縦一三三・六〇一三九 横七四・二、各表装 総丈一四三・三〇

一五九・一 総幅九三・七

〔表装〕

一文字・風帯茶地大丸龍文金欄、中廻紺地四合雲龍文金欄、上下薄茶

地唐花文綾、軸首象牙寸切

〔箱〕(現在は近年の修理の際に新造された新箱に収納。新箱については省略。)

・ 琴幅・棋幅

桐印籠蓋造 萌黄真田紐 真鍮製楕円形座金

蓋表・墨書「十番之ぬ巻 掛物 子昂筆 二幅対」【墨書「琴碁」】

蓋裏・【数】(墨文円印) 【納】(墨文円印) 墨書「拾五番貳箱之内」

【朱書「上六号上」】 【朱書「天東掛物」 墨書「第六拾九号ノ下」】

身短側面・【朱書「三号」】 / 墨書「子昂筆 / 琴 / 基 / 二幅」

・ 書幅・画幅

桐印籠蓋造 萌黄真田紐 真鍮製楕円形座金

○「十」ハ「六」ニ上書

蓋表・墨書「十番之ぬ巻 掛物 子昂筆 二幅対」【墨書「書畫」】

蓋裏・【納】(墨文円印) 墨書「拾五番貳箱之内」 【朱書「上六号下」】

【朱書「天東掛物」 墨書「第六拾九号ノ上」】

身短側面・【朱書「三号」】 / 墨書「子昂筆 / 書 / 画 / 二幅」

〔附属品〕

・ 鬱金木綿単包装(掛物用) 四枚・各墨書「子昂筆琴碁書画之圖 / 御掛物 附 / 四枚之内」

〔近年の修理記録〕

・ 平成三年(一九九二)七月十一日〜同四年十月十五日、修理。その際、旧

啄木・旧八双・旧軸木は、再使用せず別保存。旧八双・旧軸木に以下の

墨書が見いだされる。

(琴) 八双墨書「碁二」

(棋) 軸木墨書「□□□□」(判読不能) 八双墨書「ぬ引 □□ち

ん」・墨書「各 一」

(書) 軸木墨書「ひく、御座候哉 み行」

(画) 軸木墨書「九」 八双墨書「其許三」

〔文化財指定〕

・ 昭和九年(一九三四)九月一日、重要美術品指定。

〔参考文献〕

・ 佐藤豊三「描かれた茶の湯―館蔵「琴棋書画図」四幅対をもとにして―」

『金峯叢書』二三、徳川黎明会、一九九六年。

⑥ 三教図 伝趙雍筆(鄭顛仙筆) 梅竹錦鷄・柳白鷺図 伝周之冕筆 三幅

対 (掛物九二・『唐絵』一五)

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本著色

各本紙縦一四三・八 横七八・五、各表装 総丈二五五・〇 総幅九三・四

〔表装〕

一文字・風帯 紺地梅鉢文唐草金襴、中廻 白茶地牡丹唐草文金襴、上下
茶地靈芝文緞子、軸首象牙寸切

〔落款印章〕

・左右幅

〔汪氏元遇〕〔白文方印〕 〔釋印維謙〕〔朱文方印〕

〔箱〕（現在は近年の修理の際に新造された新箱に収納。新箱については省略。）

・桐印籠蓋造 萌黄真田紐 真鍮製丸形座金

蓋表・墨書「五番之 中仙人趙雍筆 三幅」
蓋裏・墨書「四 左右花鳥周之冕筆 三幅」

蓋裏・〔朱書〕〔掛物〕墨書「九號」「良順」〔朱文円印〕

〔附属品〕

・白絹袷包裂（掛物用）三枚・各 墨書「中趙雍筆／仙人」、墨書「左周之
冕筆／花鳥」、墨書「右周之冕筆／花鳥」

・狩野安信添状 一通・墨書「中仙人趙雍筆／左右花鳥周之冕／真筆無疑／
者也」法眼永真「安信」墨文円印／酉十二月一日

※墨書の二行目と三行目の間の上端裏面に、「安信」墨文円印の割印あり。

外包紙・墨書「中趙雍左右周之冕筆／御懸物法眼永真添状／壹通」

内包紙・墨書「中趙雍左右周之冕／狩野法眼添状」

〔近年の修理記録〕

・平成十五年（二〇〇三）七月二十三日～同十六年七月二十七日、修理。そ
の際、旧啄木・旧八双・旧軸木は、再使用せず別保存。

〔参考文献〕

・湊信幸「〔図版解説〕三教図」〔吉祥—中国美術にこめられた意味〕東京
国立博物館、一九九八年。

⑦ 山水図 伝牧谿筆

一幅（掛物七八）

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本墨画

本紙縦二六・二 横二七・五、表装総丈一一七・五 総幅四〇・六

〔表装〕

一文字・風帯 白地二重蔓牡丹唐草文金襴、中廻 鼠地花唐草文金紗、上
下濃茶地宝尺文緞子（高橋緞子）、軸首象牙寸切

〔箱〕

・外箱・桐印籠蓋造 萌黄地白二本筋真田紐

蓋表・墨書「牧溪筆山水之繪 壹幅」

蓋裏・〔数〕〔墨文円印〕〔朱書〕〔上壹番〕／墨書「二拾九番」〔墨書〕
「上下高橋純子」〔朱書〕〔上三拾一号〕

身裏底・墨書「大正四年八月新調」

・内箱・桐印籠蓋造 鹿革紐

蓋表・墨書「御供 御掛物 牧溪筆 山水之繪 一幅」

身短側面・〔朱書〕〔上三拾一号〕／墨書「牧溪筆／山水」

〔附属品〕

・薄茶絹単包裂（内箱用）一枚・墨書「牧溪筆 山水」

・浅葱絹単包裂（掛物用）一枚・墨書「牧溪筆墨画山水／御掛物附」

・狩野安信外題 一枚・墨書「山水牧溪筆」「安〔朱文円印〕」

包紙（外題および左の代付）・墨書「外題并代付」

・狩野安信代付 一通・墨書「口上之覚／牧溪之山水／代三百貫／五月十日」
・狩野安信添状 一通・墨書「山水掛物紙之内／豎五寸五分横／壹尺六寸

八分牧溪／真筆無疑者也／以上／五月十日／狩野法眼 永真(花押)」

包紙・墨書「添状」

・書付 一枚・墨書「栄川院拝見牧溪ニ而ハ無御座候／高然暉ニ似寄申候由
以上／午七月」

⑧ 重要文化財 龍図 伝陳容筆 重要美術品 虎図 伝牧谿筆 二幅対

(掛物一四二・『唐絵』八)

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本墨画

・龍図・本紙縦一八九・五 横一一二・三、表装 総丈三〇三・一 総幅
一三三・五

・虎図・本紙縦一八九・五 横一一二・三、表装 総丈三〇三・一 総幅
一三三・一

〔表装〕

一文字紺地牡丹唐草文金欄、中廻・風帯 白地唐花虫文銀欄、上下茶地
絁、軸首象牙寸切

〔賛・落款印章〕

・右幅(龍図)

所翁 「所翁」(朱文方印) 「蠹電室」(朱文円印) 「九淵之珍」(朱白文相
間重廓方印)

帝所

於毫茫 握天瓢於

漠而霖雨 斂神功

接崑崙之氣脈 決河

・左幅(虎図)

牧谿 「牧谿」(白文方印)

〔箱〕(現在は近年の修理の際に新造された新箱に収納。新箱については省略。)

・桐印籠蓋造 萌黄地二本白筋真田紐

蓋表：【御供式番】 墨書「五番之 掛物左龍 所翁筆 右虎右虎 牧谿筆 二幅対」【朱

書「上尙号」】【朱書「天 東 墨書「第六拾五号」】

身短側面：【朱書「上尙号」】／墨書「掛物 所翁筆 龍／虎／二幅」

〔附属品〕

・浅葱絹袷包装(掛物用)二枚

・書付類包紙・墨書「所翁 牧谿筆 二幅対／書付 四」※左の書付の包紙。ただし、包

紙に混乱が生じている。

・覚書 一枚・墨書「覚／二幅対／龍 所翁筆／虎 牧谿筆／右御掛物享保
十三申年／御所望ニ付八月十六日／若年寄衆本多伊豫守殿／宅江御城附

尾崎右衛門八／持参差出之／公方様上覽相濟同／廿八日戻り申候 御用

人衆／成瀬大膳方取扱／ 西七月」

包紙・墨書「所翁牧谿筆二幅対二添／覚書」

・狩野洞雲添状一通・墨書「(端裏書)狩采女／(宛名部分は切取)□□／
「追而書」猶々懸絵御使へ／御渡シ申候／「本文」龍之繪一覽申候／所翁

真筆一段見事ニ候／代之儀御使へ口上ニ申／達候猶期後面之時候／恐惶
謹言／五月朔日(花押)」

※紙背に付箋・朱書「所翁／牧谿／懸物／之事」墨書「公方様上覽ニ

付享保十三申八月十六日／若御老中本多伊豫守殿屋敷江／御歩行衆宰

領ニ而参り同廿八日ニ／戻り申候御用人衆成瀬大膳方取扱」

包紙・表面墨書「所翁筆 龍之絵御掛物添状／但所翁 牧谿龍虎二幅／

「對のカタ方也」裏面墨書「此所翁御掛物極書付者／下条庄右衛門より將之極札／添手侍等相渡吟味之上／其内分添置候／宝曆四戊年」

※もとは狩野洞雲添状の付箋の包紙か

包紙・墨書「延享元年子四月／所翁（牧溪付札）」

・龍図賛点字・墨書「接セツ崑コン崑クン之氣キ脈マク決ケツ河カ／漢カン而リシ霖リンス雨アメ歛メシ神シン功カウ於ガウ毫ボウ汪ニギル天ヒヤウ瓢ヒヤウ於テイ帝イシ所ニ

※表題に墨書「所翁筆龍之絵御懸物」

〔近年の修理記録〕

・左幅（龍図）

平成十二年十二月七日～同十三年四月十六日、平成十二年・十三年度国庫補助金により、修理。その際、上下の表装裂・旧啄木・旧八双・旧軸木は、再使用せず別保存。上下の裂については、展示を考慮し、元の縦幅が「上・五四・五、下・二〇・五」であったところを、「上・四六・四、下・二六・二」へ変更した。風帯の裏打紙に用いられていた反古紙については、別に保存。反古紙には、墨書「雪村布袋但たうほうゑ／一文字風帯白地きりからくさ金入／中もへき龍丸／上下浅黄絹／さうけ軸桐之箱／采女龍但りんほうゑ／酒井助右衛門」とある。

・右幅（虎図）

平成十二年十二月七日～同十三年四月十六日、平成十二年・十三年度文化財学術研究基盤整備事業により、修理。その際、上下の表装裂・旧啄木・旧八双・旧軸木は、再使用せず別保存。上下の裂については、展示を考慮し、元の縦幅が「上・五四・五、下・二〇・五」であったところを、「上・四六・四、下・二六・二」へ変更した。

尾張徳川家における唐絵の受容史的考察（一）

〔文化財指定〕

・昭和九年（一九三四）九月一日、重要美術品指定

・昭和二十八年（一九五三）十一月十四日、右幅（龍図）、重要文化財指定

〔参考文献〕

・井手誠之輔「李禎筆 竜虎図について」（『大和文華』七五、大和文華館、一九八六年）。

・志賀太郎「作品解説 龍図 陳容筆」（『室町將軍家の至宝を探る』徳川美術館、二〇〇八年）。

⑨ 重要文化財 柳燕図 伝牧谿筆 一幅（掛物六八・『唐絵』九）

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本墨画

本紙縦八七・六 横四三・九、表装総丈一九〇・六 総幅五九・四

〔表装〕

一文字・風帯濃萌黄地宝尽文金襴、中廻白茶地連雲文金襴、上下茶地唐花唐草文金襴、軸首象牙寸切

〔箱〕（現在は近年の修理の際に新造された新箱に収納。新箱については省略。）

・外箱・蠟色塗印籠蓋造 萌黄真田紐 銀製円形座金

蓋表：〔数〕〔墨文円印〕 金粉字「柳燕繪 牧溪筆」

身短側面：〔朱書〕〔上拾号〕／墨書「牧溪筆／柳燕」

・内箱・桐印籠蓋造（蓋表・側面の稜に几帳面取） 萌黄真田紐 銀製鍍

金花形座金

蓋表：墨書「柳燕繪 牧溪筆」

〔附属品〕

・鬱金木綿単包裂(内箱用) 一枚・墨書「牧溪筆／墨画無落款／御掛物附」

・白絹袷包裂(掛物用) 一枚・墨書「柳燕 牧溪筆」

〔近年の修理記録〕

・昭和五十八年(一九八三)五月三十一日、国指定文化財保存事業による修復(完了)。

〔文化財指定〕

・昭和四十五年五月二十五日、重要文化財指定。

〔備考〕

・元禄十一年(一六九八)三月十八日、五代將軍徳川綱吉が尾張家麴町邸へ御成した際に、尾張家二代光友に下賜された。『常憲院殿御實紀』巻三十七にも次の通り記されている。

十八日尾張中納言綱誠卿の筈に臨駕したまふ。(中略)けふ賜物黄門に長光御太刀。(中略)内々より綱誠卿に茶壺。(繁雪肩衝)吉通朝臣に丁子釜。光友卿に牧溪畫柳燕の掛幅。

〔参考文献〕

・『徳川實紀第六編』(吉川弘文館、一九六五年)、三三三頁。

⑩ 花籠図 伝趙昌筆 一幅 (掛物二四六一・『唐絵』七)

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本着色

本紙縦二五・九 横二四・四、表装総丈二二四・一 総幅三九・〇

〔表装〕

一文字・風帯紺地鳥菱連雲文金襴、中廻白地二重蔓小牡丹文銀襴、上下茶地紗綾形に桐文金襴、軸首象牙印可

〔箱〕

・外箱・桐溜塗印籠蓋造 薄黄地茶筋真田紐

蓋表・黒漆書「芙蓉之繪 趙昌筆 壹幅」〔葵紋〕第貳四〇號

※墨書「貳四〇」以外は朱文印(挿図1)。

蓋裏・朱書「上廿一号」

身短側面・朱書「上廿一号」墨書「趙昌筆／芙蓉」〔墨書「掛物／

第四十二号／趙昌／芙蓉」〕※二枚目の貼紙は、「掛物」を

除き全て横書きで、第一回目の売立以後の所有者によって

貼られたと見なされる。

・内箱・蠟色塗印籠蓋造 紫組紐 銀製菊花形座金

蓋表・金粉字「芙蓉之繪 趙昌筆 壹幅」

〔附属品〕

・紫絹単包裂(掛物用) 一枚

・外題(背の八双傍らに貼付)一枚・墨書「雜花 趙昌筆」

〔備考〕

・大正十年(一九二二)十一月七日入札の売立で売却されており、『尾州徳川家御藏品入札』に「二七 趙昌 芙蓉 竪八寸五分幅八寸一分」と記載されている。その後、平成二年(一九九〇)十月四日に古美術商より徳川美術館が購入した。

⑪ 寿老人・竹に鶴・桐に鳳凰図 伝呂紀筆

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本着色

三幅対 (掛物一三〇・『唐絵』一九)

各本紙縦一六七・〇 横八五・〇 各表装 総丈二一〇・四 総幅一〇〇・八

〔表装〕

一文字・風帯 白茶地唐花宝尽文金襴、中廻 紺地大牡丹丸文金襴、上下 白茶地雲文緞子、軸首象牙寸切

〔落款印章・鑑蔵印〕

・落款印章(左右幅)

〔松雪斎(朱文長方印) 四明呂廷振印(朱文方印) 雪清斎書畫

印(朱文長方印)

・鑑蔵印(左右幅)

〔緝熙殿寶(朱文方印)

〔箱〕

・外箱・桐二方棧蓋造 萌黄地二本白筋真田紐

蓋表・墨書「掛物」

左梅竹鶴 呂紀筆
中壽老人 右桐鳳凰

三幅對

蓋裏・墨書「風帶黒舩／一文字同」〔数〕(墨文円印) 〔納〕(墨文

円印) 墨書「七拾四番」 〔〇〕(朱円印) 〔朱書「掛物」墨書「第

廿七号」

身底裏・墨書「大正二年四月新調」

・内箱・桐印籠蓋造 紐・座金欠失

蓋表・墨書「

左梅竹鶴
中壽老人 右桐鳳凰

御掛物」 呂紀筆 三幅對

※「十九番之 っ十式」と「中 梅竹鶴」の下に削り痕あり。
右 桐鳳凰

身短側面・朱書「天三拾八号」／墨書「呂紀筆／左鶴梅竹／中壽

老人／右桐(欠損)】

尾張徳川家における唐絵の受容史的考察(一)

〔附属品〕

・鬱金木綿(裏白絹)袷包裂(掛物用)三枚・各墨書「呂紀筆左梅竹鶴右桐鳳凰中壽老人／御掛物附／三枚ノ内」

〔備考〕

・左右幅に呂紀の使用印である「四明呂廷振印(朱文方印)と同文の印が捺されているが、真筆の印とは異なり、日本で元禄七年(一六九四)に刊行された「古今和漢万寶全書」巻四の印譜に掲載されている同文の印に酷似している。また、「緝熙殿」は南宋の内府であり、「松雪斎」は趙子昂(孟頫)の号である。

⑫ 山水図 伝張路筆 一幅 (掛物八四・唐絵) 一八

〔材質・分量〕

掛幅装 絹本墨画

本紙縦一三三・〇 横八五・四、表装 総丈二三三・八 総幅九九・二

〔表装〕

一文字・風帯 白地九つ七宝文金襴、中廻 茶地宝尽文緞子、上下 白茶地 唐草二向獅子文緞子、軸首象牙寸切

〔落款印章〕

凸凸^⑩

〔箱〕

・桐印籠蓋造(蓋表・側面の稜に面取) 萌黄真田紐 四分一製花菱形座金

蓋表・墨書「十番之 ぬ十三 御懸物山水繪

平山筆 極札添 一幅

蓋裏・墨書「納」(墨文円印)百四番」 朱書「上廿六号」】

身短側面・朱書「上廿六号」／墨書「平山筆／山水」

〔附属品〕

- ・鬱金木綿(裏白絹)袷包裂一枚・墨書「平山筆山水／御掛物附」
- ・狩野探幽・尚信・安信添状一通・墨書「山水之繪平凸真筆／無疑者也
／已上／寛永十七曆辰」霜月廿日／狩野法眼(花押)／狩野主馬(花押)／狩野右京(花押)」

身短側面：【朱書「天十二号」／墨書「蕭山陳佑筆／滿畦生意圖」】

〔附属品〕

- ・鬱金木綿(裏白絹)袷包裂一枚・墨書「蕭山陳佑筆滿畦生意之圖／御掛物附」
- ・伝狩野安信外題一枚・墨書「菜蕭山陳佑筆」〔安〕(朱文円印)
- 包紙・墨書「菜之繪／蕭山陳佑筆外題／狩野永真法眼」
- 〔参考文献〕
- ・志賀太郎「(作品解説) 滿畦生意圖 蕭山陳佑筆」〔徳川美術館展 大名文化の華 尾張徳川家の至宝〕徳川美術館展実行委員会、二〇一二年)。
- ・Christina Yu Yu「20 VEGETABLES 滿畦生意圖」『Chinese Paintings from JAPANESE COLLECTIONS』(the Los Angeles County Museum of Art 1101-14年)。

⑬ 滿畦生意圖 陳佑筆 一幅 (掛物一〇〇二・『唐絵』二一〇)

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本著色

本紙縦四二・一 横八〇・九、表装総丈一三五・四 総幅九二・五

〔表装〕

一文字・風帯 茶地四合雲文金襴、中廻 白地卍入子菱鳳凰文金襴、上下薄茶地絛、軸首象牙寸切

〔題・落款印章〕

「味澹」白文長方印

滿畦生意

蕭山陳佑寫 「(印文未詳)」「(朱文方印)」「漢陰遺蹟」(朱文方印)

〔箱〕

・桐二方棧蓋造 萌黄真田紐

蓋表・墨書「^{廿番}ね十四 菜蕭山陳佑筆 一幅」

※「蕭山陳佑」の下と「二幅」の右横に削り痕あり。

蓋裏・墨書「滿畦生意圖／蕭山陳佑／関防味澹」
(方印の枠のみ) □ 「漢陰遺蹟」(方

印) 〇 「蕭山陳佑」
シヤウサンチンユウ 〇 「数」(墨文円印) 〇 「納」(墨文円印)

墨書「百番」【朱書「天拾二号」】

〔附属品〕

- ・鬱金木綿(裏白絹)袷包裂一枚・墨書「蕭山陳佑筆滿畦生意之圖／御掛物附」
- ・伝狩野安信外題一枚・墨書「菜蕭山陳佑筆」〔安〕(朱文円印)
- 包紙・墨書「菜之繪／蕭山陳佑筆外題／狩野永真法眼」
- 〔参考文献〕
- ・志賀太郎「(作品解説) 滿畦生意圖 蕭山陳佑筆」〔徳川美術館展 大名文化の華 尾張徳川家の至宝〕徳川美術館展実行委員会、二〇一二年)。
- ・Christina Yu Yu「20 VEGETABLES 滿畦生意圖」『Chinese Paintings from JAPANESE COLLECTIONS』(the Los Angeles County Museum of Art 1101-14年)。

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本著色

各本紙縦八六・六 横四七・八、各表装総丈一七九・九 総幅六一・二

〔表装〕

一文字・風帯 白地紗綾形に葡萄栗鼠・靈芝唐花文金襴、中廻 茶地唐草に鳳凰丸紋金襴、上下白茶地唐花唐草文緞子、軸首象牙寸切

〔題・落款印章〕

「贊」落款印章

贊・落款印章

右幅(飯牛図)

〔表装〕

一文字・風帯 白地紗綾形に葡萄栗鼠・靈芝唐花文金襴、中廻 茶地唐草に鳳凰丸紋金襴、上下白茶地唐花唐草文緞子、軸首象牙寸切

贊・落款印章

右幅(飯牛図)

〔題・落款印章〕

贊・落款印章

右幅(飯牛図)

右幅(飯牛図)

「文□□」(白文方印)

飯牛至夜半長夜其如何

不逢堯舜世懷哉扣角歌

一寧「□□土□」(朱文方印)「節齋」(朱文方印)

「幸罷罷□蒙」(白文角丸長方印)

飯牛憶當時簡編日興俱浩

歌發長嘆千載思唐虞商

調正激切魚水情相孚霸業

重齊桓賢哉一丈夫

蒙城王振「□□□」(白文方印)「東閣餘閒」(白文方印)

「□易」(白文長方印)

伊人叩角歌商聲何激烈唐虞

已云遠憂世心憤結相齊成霸

功千載名昭晰

莆易李庭脩「庭脩」(白文方印)「□□雖□」(白文方印)

「吉齋」(白文長方印)

扣角商歌片月孤飯牛曾以憶唐虞賞音莫道無

知己却與齊侯載後車

「□□□」(白文方印)「□□□」(白文方印)

左幅(鋤田図)

「文□□」(白文方印)

鋤田□忘倦還復窮遺經逢

時致□位□哉儒雅名

一寧「□□土□」(朱文方印)「節齋」(朱文方印)

「幸罷□蒙」(白文角丸長方印)

青陽□東陸南畝足靈雨萬

彙競芳華驅犢晨舉趾展

卷耕□讀悠然會斯□愜彼

幽風詩應之勤仰止

蒙城王振「□□□」(白文方印)「東閣餘閒」(白文方印)

「□易」(白文長方印)

東臯已俶載薄言事園田一

犁未及終心惟存闡編布

衣至卿相視回想當年

莆易李庭脩「庭脩」(白文方印)「□□雖□」(白文方印)

「吉齋」(白文長方印)

凌晨草際帶經犁一段烟隴畝西試問當年耕讀

處青山無恙白雲低

三山黃鍵「□□□」(白文方印)「□□□」(白文方印)

・落款印章(左右幅)

「錢塘」(朱文長方印)「石氏以明」(朱文方印)

〔箱〕(現在は近年の修理の際に新造された新箱に収納。新箱については省略。)

・外箱・桐溜塗印籠蓋造 薄黄・丹段替に茶筋真田紐

蓋表・黒漆書「牛之繪 閩次平筆 二幅對」

蓋裏・「納」(墨文円印) 墨書「三拾卷」【朱書「卷号」墨書「拾六号」】

【朱書「上八号」】

身短側面・【朱書「上八号」】／墨書「閩次平筆／牛之画」

・内箱・蠟色印籠蓋造(蓋表・側面の稜に几帳面取) 紫真田紐 銀製菊花

形座金

蓋表・金粉字「牛之繪 閻次平筆 二幅對」

〔附属品〕

・鬱金木綿単包装(内箱用)一枚・墨書「閻次平筆／二幅對中箱附」

・浅葱平絹袷包装(掛物用)一枚・墨書「牛 閻次平筆」

・白平絹袷包装(掛物用)一枚・墨書「牛 閻次平筆」

〔近年の修理記録〕

平成九年(一九九七)四月十九日、修理(完了)。旧啄木・旧八双・旧軸木は使用せず別保存。

〔文化財指定〕

昭和九年(一九三四)九月一日、重要美術品指定。

〔備考〕

・上方には絹を継ぎ足し、明朝の官僚であった王一寧(生年未詳)一四五二・王振(生年未詳)一四四九・李庭脩・黄鍵(一四〇三)歿年未詳)の賛が付せられている。

・本対幅同様の賛は失われているが、同じ画風・構図の「朱買臣図」(インディアナポリス美術館蔵)が伝わっており、もとは本対幅と合わせた複數幅で製作されたと考えられている。本対幅は「朱買臣図」に比べると本紙上部の余白が狭く、おそらくは日本で改装され、切り詰められたとみられる。その際、上部にあった落款部分を切り取り、余白に嵌め込んでいる。

・木挽町狩野家の門人である竹沢養溪(生年未詳)一八〇八)による、右幅の模本が東京国立博物館に収蔵されている(管理番号A6436)。

⑮ 牡丹図 伝王若水筆

三幅對(掛物八六・唐絵) 一一二

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本着色

・中幅・本紙縦一四七・八 横八一・〇、表装 総丈二五三・九 総幅九九・八

・左右幅・本紙縦一五〇・五 横八五・七、表装 総丈二五六・〇 総幅一〇一・五

〔表装〕

・中幅(見切表具)

廻一文字・風帯茶地蓮唐草文金襴、中花色地唐花唐草文金襴、総縁浅葱地菊唐草文緞子、軸首象牙寸切

・左右幅

一文字・風帯茶地蓮唐草文金襴、中廻紺地丸繫文金襴、上下浅葱地菊唐草文緞子、軸首象牙寸切

〔落款印章〕

・右幅

「清蒼(白文方印)」「華氏尚綱(朱文方印)」「功臣後裔(朱文方印)」

〔箱〕(現在は近年の修欠失理の際に新造された新箱に収納。新箱については省略。)

・桐印籠蓋造 紐欠失 銀製菊花形座金

蓋表・墨書「廿一番之 牡丹画 王若水筆三幅對」

蓋裏・狩野周信外題一枚・狩野常信外題二枚(三枚揃えて貼付、目の粗い裂で覆ってある。本文は「附属品」に別記。)

周信左右常信極」【墨書「御懸物中御表具／中安楽庵／一文字

古きらん／上下唐ものとなす】【墨書「風帯一文字茶地古き

らん／中古金らん／上下唐物とんす】〔納〕墨文円印〕 墨

書「百二十三番】〔朱書「上四号】〔朱書「天^東掛物」 墨書「第

六拾七号】

身短側面：〔朱書「上四号】／墨書「王若水筆／牡丹／三幅】

〔附屬品〕

・狩野周信外題 一枚：墨書「牡丹^中白鶴 王若水筆」 「周信□印」〔朱文方印）

・狩野常信外題 二枚：墨書「牡丹左 王若水筆」・「養朴」〔朱文方印）、墨

書「牡丹右 王若水筆」・「養朴」〔朱文方印）

・白絹袷包裂（掛物用）三枚：各墨書「王若水」

〔近年の修理記録〕

・平成九年（一九九七）三月四日～同十二年四月三日、文化財学術研究基盤整備事業にて修理。その際、旧啄木・旧八双・旧軸木・白平絹袷包裂は、再使用せず別保存。なお、旧軸木には四文字程度の墨書あるが、判読不能。

〔備考〕

・「江戸御小納戸日記」（徳川林政史研究所蔵）の寛政六年（一七九四）十月廿四日条に、「一牡丹三幅対元王若水筆御懸もの今般御買上三相成 御数寄屋御預けいたし候様ニとの御事ニ付 安藤祐斎へ相渡申候」とあり、寛政六年十月に購入されたことがわかる。徳川美術館学芸部部長代理・吉川美穂氏の御教示による。

・本品の左右幅から、画面のモチーフを微妙に変更して、狩野伊川院栄信筆「牡丹図」（個人蔵）が描かれている。静岡県立美術館学芸員・野田麻美氏の御教示による。

〔参考文献〕

・志賀太郎「作品解説 牡丹図 伝王淵筆」（王者の華 牡丹）徳川美術館、二〇一〇年。

・野田麻美「作品解説 狩野栄信（倣王淵）牡丹図」（幕末狩野派展）静岡県立美術館、二〇一八年）。

⑯ 許由巢父図 呉偉筆 一幅（掛物八九・唐絵）一八

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本墨画

本紙縦一四四・六 横七八・三、表装総丈二五五・三 総幅九四・〇

〔表装〕

一文字・風帯丹地雲龍文銀欄、中廻紺地大唐花文金欄、上下茶地唐花虫文緞子、軸首象牙寸切

〔落款印章〕

湖湘呉小僊寫「魯夫」〔朱文方印）

〔箱〕（現在は近年の修理の際に新造された新箱に収納。新箱については省略。）

・桐印籠蓋造 萌黄真田紐 座金欠失

蓋表：墨書「廿一番之 御掛物呉小僊筆 許由巢父之絵 一幅」

蓋裏：〔墨書「呉小僊明画ニテ御座候／名ハ偉字ハ次翁號ニ小仙一ノ明ノ成

化中ノ人】〔納〕〔墨文円印〕墨書「百二十一〇】〔朱書「天四

拾一号】〔朱書「天^{掛物}掛物」 墨書「四拾壹號】

身短側面：〔朱書「天四拾一号】／墨書「呉小僊筆／許由巢父圖】

〔附屬品〕

・鬱金木綿（裏白絹）袷包裂（掛物用）一枚：墨書「呉小僊許由巢父圖／御

掛物附

〔近年の修理記録〕

・平成八年(一九九六)二月十七日、修理(完了)。旧啄木・旧八双・旧軸木は、再使用せず保存。旧八双に墨書「此繪□分ふさ□□」と記されていることが確認された。

〔参考文献〕

・板倉聖哲「作品解説」許由巢父図 吳偉筆〔『明代絵画と雪舟』根津美術館、二〇〇五年)。

⑰ 夏木垂陰図 伝謝時臣筆 一幅 (掛物一四・『唐絵』一七)

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本墨画

本紙縦一一・六・一 横五七・六、表装総丈二三・四・六 総幅七三・四

〔表装〕

一文字・風帯濃萌黄地唐花唐草文金襴、中廻花色地紋尺風通、上下茶地大唐花文緞子、軸首紫檀寸切

〔題・落款印章〕

夏木垂陰 楞仙謝時臣 「吳中謝老」(白文方印) 「七十式翁」(白文方印)

〔箱〕

縦二方棧蓋造 薄黄地茶筋真田紐

蓋表・墨書「十九番之
つ廿三 山水 謝時臣筆一幅」

蓋裏・墨書「御表具和物切／巳三月伏見屋甚衛門申聞」〔「教」(墨文)

円印)〕〔「納」(墨文円印) 墨書「七拾三番」〕〔朱書「上廿四号」〕

身短側面・朱書「上二拾四号」／墨書「謝時臣筆／山水」

〔附属品〕

・白絹袷包裂(掛物用)一枚・墨書「周之冕筆芙蓉鴛鴦／御掛物附」

⑱ 重要美術品 官女図 伝仇英筆 一幅 (掛物一〇四・『唐絵』一七)

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本著色

本紙縦一一・八・三 横五八・八、表装総丈二三・九・九 総幅七一・七

〔表装〕

一文字・風帯薄黄地紋尺金襴、中廻花色地雲鶴文金入緞子、上下茶地雲二菱龍文緞子、軸首象牙寸切

〔箱〕

縦二方棧蓋造 萌黄地白二本筋真田紐

蓋表・朱書「九十二」 墨書「御掛物」右に朱書官女
婦人之絵 一幅

蓋裏・墨書「仇英筆」〔「納」(墨文円印) 墨書「百一番」〕〔朱書

「天」 墨書「三拾貳號」

〔附属品〕

・鬱金木綿(裏白絹)袷包裂(掛物用)一枚・墨書「仇英筆官女之画／御掛物」

〔文化財指定〕

昭和九年(一九三四)九月一日、重要美術品。

⑲ 芙蓉鴛鴦図 伝周之冕筆 一幅 (掛物九一・『唐絵』一六)

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本著色

本紙縦一一・〇 横五六・一、表装総丈二〇・八 総幅七〇・一

〔表装〕

一文字・風帯 黄地飛雲文金襴、中廻 白地蓮菊文唐草金襴、上下 薄茶地
小葵文緞子、軸首 象牙寸切

〔落款印章〕

「周之冕印」(白文方印) 「字服卿」(白文方印)

〔箱〕

・桐二方棧蓋造 萌黄真田紐

蓋表・墨書「御懸物 芙蓉鴛鴦 周之冕筆一幅」

蓋裏・【納】(墨文円印) 墨書「百三拾四番」【朱書「忝号」】／墨書「拾

号」【朱書「天拾一号」】

身短側面・【朱書「天拾一号」】／墨書「周之冕筆／花鳥」

〔附属品〕

・白絹袷包裂(掛物用) 一枚・墨書「周之冕筆芙蓉鴛鴦／御掛物附」

〔備考〕

・狩野探幽による古画の鑑定記録である「探幽縮図」のうち、「筆園佚遊」
(ベルリン東洋美術館蔵)に、本図が記録されている。留書には「同九月
十一日松平伊豆守殿今来 呂記之由其ハおとり候由申遣候」とある。こ
れより川越藩主松平信綱(一五九六～一六六二)の所持品であり、当時は
呂紀の作品として探幽へ鑑定が依頼されたことがわかる。その際、探幽
は呂紀作品とするには不足があると返答している。

〔参考文献〕

・ベッティーナ・クライン「研究資料 ベルリン東洋美術館蔵 縮圖畫帖
「筆園佚遊」(『國華』一〇九一、國華社、一九八六年)。

②〇 花鳥図 伝周之冕筆

一幅 (掛物九〇・唐絵) 一六

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本着色

本紙縦一三三・六 横六八・八、表装総丈二一五・二 総幅八三・〇

〔表装〕

廻一文字・押風帯 白地重松皮菱二唐草文錦(大正時代に成立した現役の
台帳には、「秋田織」と記されている)、総縁 茶地梅竹尾長鳥文緞子、
軸首 堆黒模菊花文浮彫

軸首 堆黒模菊花文浮彫

〔落款印章〕

萬曆辛丑夏日周之冕寫 「周之冕印」(白文方印) 「服卿」(白文方印)

〔箱〕

桐二方棧蓋造 濃縹地白筋真田紐

蓋表・墨書「三番之 花鳥 周之冕筆一幅」

蓋裏・【朱書「上忝番」】／墨書「四十三番」朱書「改」【朱書「上廿

三号」】 墨書「寛政十一年」

身短側面・【朱書「上廿三号」】／墨書「周之冕筆／花鳥」

〔附属品〕

・鬱金木綿(裏白絹)袷包裂(掛物用) 一枚・墨書「周之冕花鳥之繪／御掛
物附」

〔備考〕

・廻一文字・押風帯に用いられた裂の残りが現存している(裂一〇五四)。
その当て紙の裏に、「文政十年亥十一月改／凡金壹分式朱位」と墨書が
あるが、表装に用いられた時期は未詳である。

② 重要美術品 仙人図 劉俊筆 一幅 (掛物 一・一三〇・『唐絵』二〇)

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本着色

本紙縦一三三・二 横八一・六、表装総丈二三一・八 総幅九七・一

〔表装〕

一文字・風帯薄茶地雲文金襴、中廻茶地大牡丹唐草文金襴、上下浅葱

地丸龍紋に宝尽文緞子、軸首黒塗撥形

〔落款印章〕

廷偉「錦衣都指揮」(朱文方印)

〔箱〕現在は近年の修理の際に新造された新箱に収納。新箱については省略。

桐印籠蓋造 萌黄真田紐 銀製梅花形座金

蓋表・墨書「□番之御掛物劉俊筆 仙人之繪」

蓋裏・〔数〕(墨文円印)「朱書〔天掛物〕墨書「四拾貳號」良順」(朱文円印)

身短側面・

劉俊筆／仙人之画

〔附属品〕

・白平絹袷包装

・鬱金木綿(裏白絹)袷包装(掛物用) 一枚・墨書「劉俊筆仙人之画」御掛物附

物附

・伝狩野安信外題 一枚・墨書「仙人劉俊筆」「安」(朱文円印)

外包紙・墨書「極札入」

中包紙・墨書「極札入」

内包紙・墨書「仙人劉俊筆極」

〔近年の修理記録〕

・大正二年(一九一三)七月、修理(完了)。

・平成十年(一九九八)十一月二十八日、修理(完了)。旧啄木・旧八双・旧軸木は再使用せず別保存。

〔文化財指定〕

昭和九年(一九三四)九月一日、重要美術品認定。

〔備考〕

MOA美術館蔵本の「探幽縮図」に記載。「同四月十三日／長谷川甚五郎来／中古ノ上々也」と留書が添えられる。なお、探幽縮図については、東京大学の秋山聰氏・板倉聖哲氏・高岸輝氏・玉川潤子氏・増記隆介氏の御厚意により、河野元昭氏を研究代表者とする科学研究費補助金研究「探幽縮図の総合的研究」(平成十年度～十三年度科学研究費補助金基盤研究A2研究成果報告書)でまとめられたCD-Rのデータを参照した。

昭和二十四年三月三十一日、徳川義親氏より寄贈。

② 花鳥図 孫億筆 一幅 (掛物 一・一三三・『唐絵』二二)

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本着色

本紙縦一四七・一 横八一・九、表装総丈九七・四 総幅二四五・七

〔表装〕

一文字・風帯紺地雲文金襴、中廻茶地二重蔓大牡丹文金襴、上下浅葱

地中唐花唐草文緞子、軸首黒塗撥形

〔落款印章〕

康熙壬辰春三月于峰孫億寫「于峰道者」(朱文方印)「孫億之印」(白文方

印)

印)

印)

印)

印)

印)

印)

印)

印)「惟年」(朱文方印)

〔箱〕

桐印籠蓋造(蓋表・側面の稜に面取) 薄黄地茶筋真田紐

蓋表・墨書「廿一番之
な廿九 桃文鳥絵 孫億筆 一幅」

蓋裏・【朱書「上七号」】【朱書「老号」墨書「拾四号」】

身短側面・【朱書「上七号」】／墨書「孫億筆／桃文鳥」

〔附属品〕

・白絹単包裂(掛物用) 一枚・墨書「孫億筆附／桃文鳥繪」

②3 花鳥図屏風 孫億筆 六曲一双 (屏風七・『唐絵』二四〇二五)

〔材質・法量〕

屏風装(十二図を一扇に一図ずつ、金箔地に押絵貼) 絹本着色

各本紙縦二三〇・〇 横五四・七、各表装総高一六五・八 総幅三八七・〇

〔表装〕

椽朱塗唐草文蒔絵、飾金具四分一製牡丹唐草文透彫

〔落款印章〕

右隻第一扇、左隻第三・四・五扇・康熙丙戌花朝于峰孫億寫「于峰道

者」(朱文方印)「孫億之印」(白文方

印)「惟年」(朱文方印)

右隻第二・三扇、左隻第一・六扇・康熙丙戌仲春于峰孫億寫「孫億之

印」(白文方印)「惟年」(朱文方印)

右隻第四・五・六扇、左隻第二扇・康熙丙戌孟春于峰孫億寫「孫億之

印」(白文方印)「惟年」(朱文方印)

〔附属品〕

尾張徳川家における唐絵の受容史的考察(一)

・鬱金木綿(裏白絹)袷包裂 一枚・墨書「孫億筆花鳥ノ画六枚折ノ御屏風附」

・戸田禎佑・小川裕充編集『花鳥画の世界第十卷 中国の花鳥画と日本』(学

習研究社、一九八三年)。

・板倉聖哲「作品解説 花鳥図屏風 孫億筆」(『対幅—中国絵画の名品を

集めて—』大和文華館、一九九五年)。

・黄立芸(植松瑞希訳)「孫億とその花鳥画について—東アジア絵画史の観

点から—」(『大和文華』二二五、大和文華館、二〇一三年)。

②4 菜に蝶図 伝趙昌筆 一幅 (掛物一三三・『唐絵』七)

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本着色

本紙縦二三・一 横二・五、表装総丈一一七・五 総幅三五・九

〔表装〕

一文字・風帯紺地に二重蔓牡丹唐草文金襴、中廻茶地唐花唐草文金襴、

上下萌黄地青海波金襴、軸首象牙寸切

〔落款印章〕

「徐澤」朱文長方印

〔箱〕

・外箱・桐溜塗印籠蓋造 薄黄地茶筋真田紐

蓋表・黒漆書「菜蝶之繪 趙昌筆 壹幅」

蓋裏・【数】墨文円印【納】墨文円印 墨書「四拾番」【朱書「上

老番」／墨書「二拾三番」／朱書「改」【朱書「上二拾号」】

身短側面・【朱書「上二拾号」】／墨書「趙昌筆／菜蝶」

・内箱・蠟色印籠蓋造 紫組紐 銀製菊花形座金

蓋表・金粉字「菜蝶之繪 趙昌筆壹幅」

〔附属品〕

・白木綿袷包装(内箱用) 一枚・墨書「趙昌筆／掛物内箱附」

・白平絹単包装(掛物用) 一枚・墨書「趙昌筆／掛物附」

・外題(八双脇に貼付) 一枚・墨書「雜花 趙昌筆」

〔備考〕

・画面右上(右端から八・三種、上端から七・八種前後の部分)、画面左上(左端から四・九種および八・四種、上端から三・三種の部分)に画絹の切り継ぎ跡が見られる。

〔参考文献〕

・榊原悟「眼の極楽32 花と鳥のかたち」(『岡崎市美術館博物館ニュースA R C A D I A』八三、岡崎市美術館、二〇二〇年)。

②6 柳鷺図

一幅 (掛物九九・『唐絵』一二三)

〔材質・法量〕

掛幅装 絹本着色

本紙縦三七・一 横三六・三、表装総丈二二五・五 総幅五二・五

〔表装〕

一文字・風帯 萌黄地星入菱に梅花虫文金襴、中廻 薄茶地二重蔓桐唐草文金襴、上下紺地作土花兔文金襴、軸首象牙寸切

〔落款印章〕

「潤城清趣」白文方印

〔箱〕

桐二方棧蓋造 薄黄地茶筋真田紐

蓋表・墨書「掛物 柳鷺 一幅」

蓋裏・【納】(墨文円印) 墨書「百七十四番」〇三二、七見せ消【墨書「良」 朱書「五」

墨書「十四」【朱書「天拾三号」】

身短側面・【朱書「天拾三号」】／墨書「柳鷺」

〔附属品〕

・鬱金木綿(裏白絹)袷包装(掛物用) 一枚・墨書「柳鷺／御掛物附」

②7 十六羅漢渡川図 張成龍筆 一卷 (巻物二二・『唐絵』一二二)

〔材質・法量〕

卷子装 絹本淡彩

本紙縦二八・三 長四六一・一、表装総幅三〇・五 総長五一六・八(軸は除く)

〔表装〕

表紙 浅葱地龍花卉文緞子、紫平紐、見返・台紙 蠟箋、軸首象牙木口挽込

〔落款印章〕

大梁張成龍寫 「張成龍印」(白文方印)「白雲長」(白文方印)

〔箱〕

桐二方棧蓋造 萌黄地二本白筋真田紐

蓋表・墨書「唐画 張成龍筆一卷」

蓋裏・【墨書「十六羅漢河渡繪」】【朱書「上五号」】

〔附属品〕

・浅葱絹袷包装(掛物用)・墨書「唐画十六羅漢河渡圖／御巻物附」

(続)

金 鯨 叢 書 第四十九輯 (年一回刊行)

— 史学美術史論文集 —

令和四年 三月 三十日 編集
令和四年 三月 三十日 印刷・発行

編集者

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
深 井 雅 海
徳 川 義 崇

発行者

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
公益財団法人 徳川黎明会
電話 (3950) 〇一一七番(代)

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川林政史研究所
電話 (3950) 〇一一七番(代)

〒461-0023 名古屋市中区徳川町一〇一七
徳川美術館
電話 (935) 六二六二番(代)

〒605-0089 京都市東山区元町三五五
株式会社 思文閣出版
印刷所
電話 (533) 六八六〇番(代)